

これからの時代の社会基盤としての
社会教育を考える
～今、なぜ社会教育なのか～

令和8年（2026年）3月
社会教育実践研究センター長 佐藤 貴大

はしがき

本報告書は、国立教育政策研究所令和7年度教育研究公開シンポジウム「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～」の概要、講演録及び参加者アンケートをまとめたものです。

現在、中央教育審議会において社会教育の在り方について議論されており、社会教育主事や社会教育士の取り組みの活性化による地域課題の解決等が期待されています。本シンポジウムでは、「今、なぜ社会教育なのか」と題して様々な「コミュニティ形成」の現場を取り上げながら、真の「社会基盤形成」とは何か、そのためにどのような社会教育の学びが必要なのかについて考え、社会教育の推進に資することを目的として実施しました。

本シンポジウムは、対面及びオンラインによるハイブリット形式で行いました。783名（対面162名、オンライン621名）の参加登録があり、当日は541名（対面121名、オンライン420名）が参加しました。また、参加者アンケートから、たくさんのご感想と今後に向けた示唆をいただき感謝いたします。

おかげをもちまして、社会教育実践研究センターは設立60周年を迎えました。

本シンポジウムの開催により、多くの皆様方にとって社会教育への理解や、興味・関心につながるとともに、教育に携わる全ての関係者に本報告書をご活用いただき、それぞれの地域、自治体において生涯学習、社会教育の取り組みに活用いただけることを期待いたします。

引き続き、皆様方からの厚いご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年（2026年）3月
佐藤 貴 大
社会教育実践研究センター長

目次

第1章 シンポジウムの概要	1
第2章 シンポジウム講演録	7
開会挨拶	
森田 正信（国立教育政策研究所長）	8
共催者挨拶	
高田 行紀（文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長）	10
特別講演「これからの社会教育の在り方を考える～アートで社会課題を解決する取組から～」	
日比野 克彦（東京藝術大学長）	11
調査研究報告	
「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究」中間報告	34
志々田 まなみ（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官）	
シンポジウム	
「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～」	45
コーディネーター	
青山 鉄兵（文教大学准教授）	
登壇者	
藤野 真一郎（恵庭市教育委員会教育総務課長）	
豊田 庄吾（三次市教育委員会教育部次長（初代隠岐國学習センター長））	
鈴木 貫司（NPO 法人わかもののみち/みんなの公民館まるセンター長）	
閉会挨拶	
佐藤 貴大（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長）	80
第3章 アンケート結果から得られた示唆	83

第1章 シンポジウムの概要

以下では、本シンポジウムの概要、参加者数、講演内容の要約を記す。

シンポジウム名

これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～

開催日時

令和7年12月13日（土）13：30～17：00、ハイブリッド形式（対面およびオンライン）

目的

社会教育実践研究センター設立60周年を記念して、本シンポジウムを開催するものです。現在、中央教育審議会において社会教育の在り方について議論されており、社会教育主事や社会教育士の取り組みの活性化による地域課題の解決等が期待されています。本シンポジウムでは、「今、なぜ社会教育なのか」と題して様々な「コミュニティ形成」の現場を取り上げながら、真の「社会基盤形成」とは何か、そのためにどのような社会教育の学びが必要なのかについて考え、社会教育の推進に資することを目的としています。

プログラム

開会挨拶（13：30～13：45）

森田 正信（国立教育政策研究所長）

高田 行紀（文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長）

特別講演（13：45～14：45）

「これからの社会教育の在り方を考える～アートで社会課題を解決する取組から～」

日比野 克彦（東京藝術大学長）

調査研究報告（14：45～15：05）

「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究」中間報告

志々田 まなみ（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官）

シンポジウム（15：15～16：50）

「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～」

コーディネーター

青山 鉄兵（文教大学准教授）

登壇者

藤野 真一郎（恵庭市教育委員会教育総務課長）

豊田 庄吾（三次市教育委員会教育部次長（初代隠岐國学習センター長））

鈴木 貫司（NPO 法人わかものまち／みんなの公民館まるセンター長）

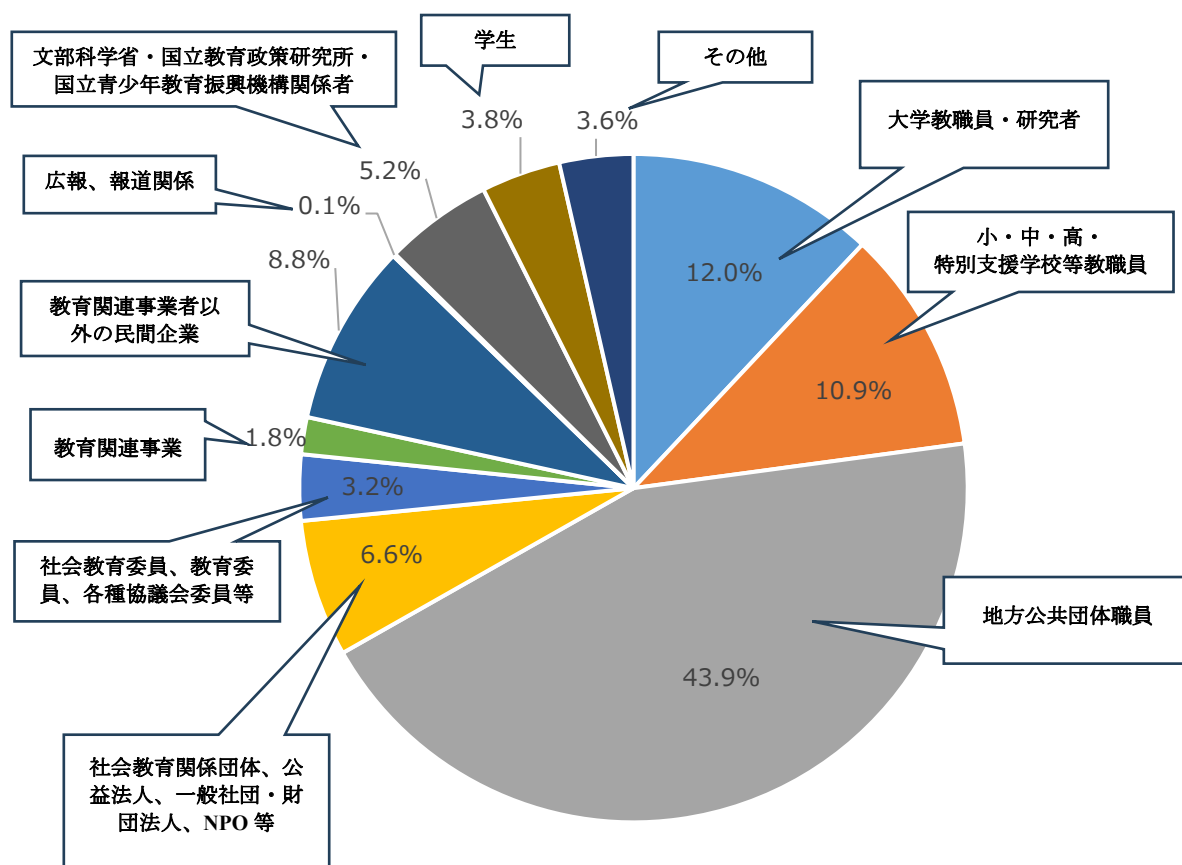
閉会挨拶（16：50～17：00）

佐藤 貴大（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長）

参加者数

当日の参加者数は541名であり、参加申込者783名に対して、約69%の参加率であった。参加申込者の属性を図1に示す。

図1 参加申込者の属性



講演内容の要約

特別講演「これからの社会教育の在り方を考える～アートで社会課題を解決する取組から～」

日比野氏の登壇に先立ち、導入として自己紹介を兼ねた社会の課題に対するアートの可能性を問いつけることを内容とした動画が配信された。

日比野氏の登壇後は、従前の美術館の展覧会での鑑賞に加え、地域を生かした作品を現地の地形を生かして制作し鑑賞することが、地域の芸術祭などで広がりを見せており、それらが地域コミュニティの形成にも加え、社会課題の解決に寄与していると説明があった。

また、そもそもアートとは何かということに触れ、アートは分からないものであり、分からないものであるからこそ、分からないものを受け入れる力があることをSDGsの17の目標の一つ一つが色を持っていることに例え、それぞれのSDGsの達成にはここを動かす力が必要であり、それを引き出す力がアートにあることについて説明があった。

更に、芸術未来研究場をはじめとした東京藝術大学の取り組みを紹介いただき、人々の健康について、肉体的なところであれば、薬物療法や外科療法で治療できるが、ここに心的な療法として、人とのつながりを処方する「社会的処方」が存在しており、更にこの「社会的処方」の根源としての「文化的処方」が存在し、この「文化的処方」にアートが持つ力を生かして、アート活動と医療・福祉・テクノロジーを組み合わせる回復・予防につなげる考え方を紹介いただき、最後に「アートは生きる力である」とまとめられた。

調査研究報告「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究」中間報告

志々田まなみ国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官より、社会教育実践研究センターの調査研究事業である「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究」の中間報告が行われた。

本調査研究は令和6年度～8年度の3か年計画で実施しており、今回はその中の一部として、都道府県及び市区町村教育委員会生涯学習・社会教育主管課や、担当者、社会教育士を対象に行ったアンケート調査の結果について、調査研究の背景、調査研究の目的、質問紙調査の概要、質問紙調査の結果に分けて報告が行われた。

志々田総括研究官からは、社会教育主事の配置状況や、社会教育士の活動状況、社会教育人材ネットワークの現状などについて、質問紙調査の結果から見えるそれぞれの課題、都道府県における状況、市区町村における状況を確認した上で、社会教育士としての活動ができていない状況、活動を広げるための社会教育士同士のネットワークの構築の必要性、社会教育人材ネットワークの構築の重要性、社会教育人材ネットワーク構築のための運営が課題となっていること、特に社会教育主事と社会教育士の連携には社会教育主事の配置が重要であることなどが報告された。

シンポジウム「これからの社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～」

シンポジウムでは、青山鉄兵文教大学准教授をコーディネーターに迎え、藤野真一郎恵庭市教育委員会教育総務課長、豊田庄吾三次市教育委員会教育部次長、鈴木貫司NP0法人わかものまのまち/みんなの公民館まるセンター長に御登壇いただき、「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～」と題して議論が行われた。

はじめに、青山氏から社会教育に関して話題提起を行うとともに、オンラインフォームを活用して会場参加者、オンライン参加者からも直接御意見、御質問をもらいながら展開する

手法がとられた。

まず、登壇者の藤野氏からは自身が市の防災担当になった頃に起こった胆振東部地震の対応について、社会教育主事の経験と社会教育主事の専門性を意識しながら対応に当たったこと、その後の防災学習や防災マニュアル作成に関して、防災活動によってその地域がどう変わってほしいかなどを意識して活動していたことについて話があった。

次に豊田氏からは以前所属していた島根県海士町での地域づくりの経験について、つながりを活かした学びづくりのための「隠岐國学習センター」の事例、定住ではなく毎年1年だけ若者に移住してもらう取組の「大人の島留学」の事例から、社会教育は、「地域につながり直す力」を育てる営みであることなどの話があった。

鈴木氏からは、もともと自治体と連携した公民館の活動をしていたが、コロナの影響により自治体との活動が困難になったことから、自治体に頼らずに活動できる公民館として、「みんなの公民館まる」を立ち上げた経緯と、中高生世代には圧倒的な投資が必要であるとの考えからみんなの公民館まるの現在までの取り組みを紹介いただいた。

その後は、4人全員がマイクを持ったまま自由に話す形式を取り、各々の話について、各登壇者から感想を頂くことをきっかけに社会教育とは何か、社会教育の本質とは何かという今回のシンポジウムの核心に迫る内容で、それぞれの本音が率直に語られ、これまでの社会教育にとらわれないこれからの時代に合った社会教育の可能性について期待が示された。

当日の発表資料や動画は、以下のウェブサイトおよび国研 YouTube より公開しているので、是非御覧いただきたい。

【国研 HP】 https://www.nier.go.jp/06_jigyousymposium/sympo_r07_01/index.html

【国研 YouTube サイト】 <https://www.youtube.com/@nierchannel>

第2章 シンポジウム講演録

開会挨拶

国立教育政策研究所長 森田 正信

皆様こんにちは。国立教育政策研究所長の森田でございます。令和7年度教育研究公開シンポジウムの開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本日は年末のご多用の時期、また土曜日にも関わらず、大変多くの皆様に本シンポジウムにご参加いただきましたことに心より御礼申し上げます。また、本日のシンポジウムのためご登壇くださる講師の皆様方にも改めて感謝申し上げます。

さて、国立教育政策研究所の社会教育実践研究センターは、1965年7月に国立社会教育研修所として設立されてから、本年で60周年を迎えました。設立時の名称は研修所でしたが、2001年に当研究所内に設置される際に、社会教育実践研究センターとなり、社会教育指導者を対象とした研修事業に加えて、社会教育事業等の実態調査や学習プログラム事業の評価指標等を開発する実践的な調査研究を主に担う組織となりました。これまで個々の研修事業や調査研究を通じて、全国の社会教育事業の活性化と、指導者の養成や資質向上および関係者のネットワーク構築に寄与するよう努めてまいりました。

現在、中央教育審議会では、今後の社会教育の在り方について審議されております。社会が抱える課題が複雑化する中、社会教育主事や社会教育士等の取り組みの活性化により、学びを通じて人々の繋がりや関わりを創出し、協力し合える関係づくり、またその土壌を耕すことで持続的な地域コミュニティの基盤を形成することが期待されております。

そこで本日のシンポジウムでは、社会教育実践研究センター設立60周年を記念するとともに、テーマを『これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～』といたしまして、様々なコミュニティ形成の現場を取り上げながら、今社会教育に求められている役割を果たしていくための道筋について探ってまいりたいと思います。

特別講演では、東京藝術大学長の日比野克彦先生に、「これからの社会教育の在り方を考える～アートで社会課題を解決する取組から～」と題してご講演をお願いしております。その後、昨年度より社会教育実践研究センターにて取り組んでいる「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究事業」の質問紙調査の結果について、本研究所総括研究官の志々田より報告いたします。

それに続くシンポジウムでは、人づくり・つながりづくりの実践に関わられている北海道恵庭市教育委員会の藤野様、広島県三次市教育委員会の豊田様、みんなの公民館まるの鈴木様から、それぞれの取り組みについてご発表いただくとともに、文教大学准教授の青山鉄兵先生のコーディネートにより、ご参加の皆様とともにこれからの社会教育の在り方を探ってまいりたいと思います。

本日のシンポジウムにご参加の皆様にとりまして、有益な情報共有の場となり、社会教育の更なる振興へと繋がるきっかけとなりますことを願っております。結びに、本研究所への引き続きのご支援をお願いいたしますとともに、皆様方の一層のご活躍を祈念し、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。どうぞ本日はよろしくをお願いいたします。ありがとうございました。

共催者挨拶

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長 高田 行紀

皆さんこんにちは。文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長の高田でございます。今年度の教育研究公開シンポジウムの開催に当たりまして、共催者の立場として一言ご挨拶申し上げます。

まず、本日は会場およびオンラインにおいて、多数の皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

さて、今後の社会教育の在り方につきましては、令和6年6月に文部科学大臣から『地域コミュニティの基盤を支える今後の社会教育の在り方と推進方策について』中央教育審議会へ包括的な諮問がなされまして、現在審議が行われているところでございます。

これまでに、『社会教育人材を中核とした社会教育の推進方策』につきまして、先行して議論が進められ、令和7年3月31日に意見の整理が取りまとめられたところでございます。この意見の整理におきましては、対話を通じた主体的な学びや活動などの社会教育における学びの特徴を生かしながら、「人づくり・繋がりづくり・地域づくり」を進め、社会課題の解決やウェルビーイングの向上を図るといった社会教育の在り方が示されたところでございます。

その上で、社会教育主事や社会教育士といった社会教育人材の育成や活躍促進、ネットワーク化を図りながら、社会教育人材を中核として、関係機関等との連携・協働により、社会教育全体を振興していくということが求められているところでございます。

本日のシンポジウムにおきましては、このような中央教育審議会の議論も踏まえたプログラムとなっているところでございます。

一方、文部科学省におきましては、このような動きを受けまして、特に現場の実状にも留意する必要があるということで、全ての都道府県・指定都市の教育委員会との個別のオンラインミーティングを来週から順次実施することにしておりまして、情報や課題の共有を含めて、忌憚のない意見交換を現場の皆様とできればと思っているところでございます。

また現在、国会で審議中の令和7年度補正予算案におきまして、地域の社会教育人材を都道府県が組織的に活用できる仕組みを整備する「社会教育人材ネットワークを活用した地域作り活性化事業」が補正予算案に盛り込まれたところでございます。本事業に基づき、社会教育人材ネットワークの全国整備を促進していきたいと考えているところでございます。

中央教育審議会の答申については、来年の夏頃を見込んでおり、補正予算の動きなどもあわせて、ここ数年は改めて社会教育に対する注目も高まっていると思っており、社会教育全体を前進させる絶好のタイミングであると我々は考えているところでございます。ご参加いただいている皆様の一層のご協力と益々のご活躍を期待しております。

最後に、本日のシンポジウムが皆様にとって実りあるものとなりますことを祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしく申し上げます。

特別講演「これからの社会教育の在り方を考える～アートで社会課題を解決する取組から～」

日比野 克彦（東京藝術大学 学長）

国立教育政策研究所教育研究 シンポジウム特別講演

東京藝術大学学長 日比野克彦
2025年12月13日

（登壇前に日比野学長出演の動画が流れる）

よろしく願いいたします。日比野です。冒頭に映像を流させていただきましたが、自己紹介的なもので一番わかりやすいかなと、紹介させていただきました。今日は、『国立教育政策研究所 教育研究公開シンポジウム 特別講演』ということで、お呼びいただきましてありがとうございます。現在、私は東京藝大の学長を4年務めさせていただいております。

今日は、いくつかスライドを用意して、最近の活動では今日の公開シンポジウムのテーマである「社会教育」というところと符合するような活動も、アートを介して大変多く展開させていただいていますので、その事例や今日指しているものをご紹介させていただきながら、1時間お話しさせていただければと思います。

アートの役割が変化してきている

東京藝大というと音楽・美術という学部がありますが、世の中的にアートの役割が少しずつ変化してきているのではないかという実感があります。藝大が今年138年目。上野にあり、お隣に東京国立博物館がありますが、東京国立博物館は数年前に150周年。150や140という数字をいろいろなところで聞きますが、明治維新ですよね。そのときに様々な学問の体系とか、西洋的な考え

方、社会のシステムインフラなどが入ってきた、という中でアートも取り入れられてきております。

美術館での展覧会

今日は美術中心にお話しさせていただきますが、まずアートというと、美術館の展覧会。美術に接してみようかなというときは、上野の森で西洋美術館行ってみようかとか、東京都美術館に行ってみようかとか、そういった行動になると思います。

美術館での展覧会というのが一番基本的で、美術館に行くと壁に絵が飾ってあり、静かに鑑賞する。一対一で見る空間というのが、アカデミックで基本的な鑑賞美術との接し方になるかと思

ます。作品が壁に整然と並んでいるのが美術館の様子です。

美術館での展覧会

アトリエで制作した作品を美術館に搬入して
室内で展示する

美術館の展覧会の特徴がどういったものか
というと、当然作家がいますので、作家がア
トリエで制作したものを美術館に搬入し、壁
に設置して、用意ができたなら開館して、鑑賞者
が美術館の部屋の中に来て絵を見るところとい
うことになります。ですので、作家と鑑賞者が接す
ることは基本的にはなく、制作をしたアトリ
エという場所と展示の場所というものも隔た
たれている、別になっているというものです。

美術館での展覧会 x 地域での芸術祭

<美術館での展覧会>
アトリエで制作した作品を美術館に搬入して室内で展示する

<地域での芸術祭>
地形を生かした作品を現地の特徴を生かして現地で制作する

最近では美術館での展覧会と、もう一つ、地
域での芸術祭というものがここ数十年すごく
盛んに行われてきました。美術館の展覧会と
対比して何が違うかということ、美術館では今
言ったようなアトリエで作家が制作したもの
を美術館に持ってきて展示する。一方、地域
での芸術祭の特徴というのは、作家が地域を
訪れて、地域に入ってその場所の地形を生か
した作品を現地で制作していくというものが、
対比したときの特徴になります。

<地域での芸術祭>
地域性を生かした作品を
現地の特徴を生かして制作

大地の芸術祭
新潟県妻有アートトリエンナーレ
2000年より3年に一回開催

地域の芸術祭。地域性を生かした作品を、現地の特徴を生かして制作していくというものです。
これの一番代表的で先進的な例としては、大地の芸術祭というものが 2000 年から新潟県の「妻
有」という地域、十日町市を中心としたエリアで開催されました。3年に1回、トリエンナーレ
が開催されています。

新潟県の山奥深いところに棚田があり、その棚田の中にあるイリア・カバコフさんの作品です。
農民たちの昔の風景をシルエットにし、棚田の中に彫刻を設置しているものです。ちょうど5月、
6月ぐらいの田植えの風景で青々とした苗がある。だんだん背が伸び、実ってきて、黄金色にな
り、収穫され、冬になったら雪が積もり、雪の風景の中になる。四季折々の風景の中で作品の印

象も変わっていく。当然イリア・カバコフさんは現地に入り、地域の人たちと会話をして、農業の営みの話やどういう道具を使うとか、地域の話聞きながらアイデアをここで作って制作し、設置したということが、とても特徴になります。

大地の芸術祭の作品で、中国のヤンソンさんという作家ですけれども、使わなくなったトンネルの床面のところに鏡面仕上げをして、観客たちに風景の中でイリュージョン的な世界を広げていく。とてもインスタ映えするというので、人気になって、連日人が集まってくる。こういう大地の芸術祭が行われている妻有という地域は限界集落です。社会的な大きな課題として、高齢化、限界集落。そして地域の習慣や伝統が途絶えていく、というときにアーティストが入ることにより、その地域の特性、地形の魅力というものを見直し・引き出し、それを生かした制作物を作り、そしてそれをきっかけにして人がやってくるというような、社会的な課題に対しての解決の糸口を作るきっかけにもなっています。



明後日朝顔プロジェクト
日比野克彦



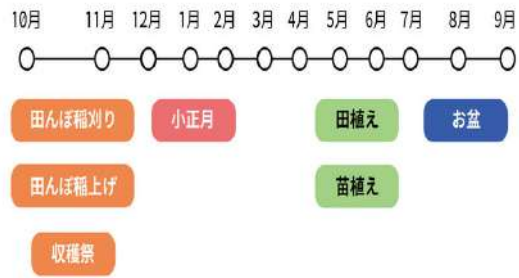
明後日朝顔プロジェクト

こちらは私も参加させていただいています。これは十日町の松代筋平（まつだいあざみひら）という集落。僕が入ったのが2003年第2回大地の芸術祭からです。その当時で、既に世帯数が20何件、人口100人未満、平均年齢が60代でした。それからもう20年経っていますから、プラス20年ということで平均年齢も上がっています。そこで私がやってきているのは、この廃校になった小学校を生かして、校舎にロープを150本ぐらい張って、朝顔の育成を地域の人たちと春夏秋冬・毎年やっています。秋になると種が採れて、その種をまた来年植えて、夏になったら花が咲くという植物の繰り返しのルーティンに人間のリズムが合わさって、今年で23~4年目になっています。この中で東京から大学生や社会人なども毎年訪れて、学生だったあの人がこの地域で暮らすようになり、家族も持ち、子供も生まれているようなことも起こっていたり、村の習慣であったお祭りが復活するきっかけになったりしています。



<https://www.hibinospecial.net/direction/%E6%98%8E%E5%BE%8C%E6%97%A5%E6%96%B0%E8%81%E9%E7%A4%BE%E6%96%87%E5%8C%96%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E9%83%A8/>

種は船 日比野克彦



1年間のルーティンは、集落なので、農業と半農の集落です。田んぼの習慣というのは1年の中でのルーティンにあり、朝顔のアート活動も入り、村の行事にアーティストや学生たちも参加して毎年そこに訪ねていっていると。田んぼの苗植えから稲刈り・収穫というものと、あとは村のお祭りにも参加し、朝顔の種を収穫してまた来年に繋げていくようなこと、お米の収穫と朝顔の収穫を地域の人たちと一緒に年間を通してやっています。

これは肥料にも見えますけれども、全部種です。 「明後日朝顔プロジェクト」というタイトルで始まっているのですが、今は全国29地域で「この種、まくよ」というようなことで、明後日朝顔の活動は繋がっております。赤ちゃんが産まれたり、冬は本当に雪深いところで3m~5m積もり、小正月にどんど焼き・左義長などがあり、年男年女を祝う習慣、そして縁起物で顔に墨を塗ったりとかする。夏になったら絵に描いたような日本の夏休みの風景がある。年々繰り返している活動をアート活動として

おります。

いわゆる植物を育てるといことは誰でもできることなのですが、植物を育てる、そして種が採れる。その中に様々な人たちの活動の記憶が詰まっているのだという種を見たときのイメージをするきっかけとして、明後日朝顔というキーワード。ただの種だねというのではなく、これがいろいろな地域の人たちとの繋がりの中で生まれてきている種だよということがあって、それが1枚の絵を見るように、その種からいろいろな想像力を働かせることができるというのがアートの力だと思います。

瀬戸内国際芸術祭

地域での芸術祭の発展により
アートの役割が変化

地域の魅力を価値化(地形、遺産、習慣..)
＜大地の芸術祭(新潟県)2000～＞

香川県の島々
2010年から3年位一回開催

地域コミュニティの形成

瀬戸内国際芸術祭(香川県)
2010～

人と人のつながり

地域での芸術祭の活動発展によりアートの役割が変化してきております。地域の魅力の価値化になっていると。そして大地の芸術祭とも一つ「瀬戸内国際芸術祭」。これが2010年から始まりました。全体的なプロデューサーは、北川フラムさんが、大地の芸術祭も瀬戸内国際芸術祭も担当されております。瀬戸内国際芸術祭は、香川県の島々中心に3年に1回。特徴は大地の芸術祭と同様のところもありますが、も

う一つ特徴的なことは地域コミュニティの形成というものが大きな評価・成果となっていると思います。



人と人の繋がりですね。小さな島々を案内する、そしてアーティストたちと島民を繋げるサポーターが「こえび隊」という名称で、地域に入り込んでいく。この「こえび隊」は地元の人たちも多いのですが、遠く県外や関東・九州から「こえび隊」を志願してやってくる人たちも大変多く、島民との交流というものを一生懸命繋ぐ、繋ぎ役。コミュニケーター役というのが形成されている。この「こえび隊」なくし

て、瀬戸内国際芸術祭の現在や成功はあり得ない。アーティストたちだけが突然島に入っても、島のルールやいろいろな習慣があります。そこをしっかりと繋いでくれる。そして島民やアーティストのプラスになるようキュレーション・コーディネーションを「こえび隊」が担っており、「こえび隊」という組織体がしっかりと教育やリサーチ、研修プログラムなどもしています。



海底探査船美術館一昨日丸 日比野克彦

島民との交流も盛んに行われていて、私も作家として参加させていただき、粟島という島で活動をしています。海底にいろいろなものが落ちているというか、埋蔵・埋物されている。そういうものを拾い集めて展示する『海底探査船美術館一昨日丸』という船があるのですが、この船で海の中にあるいろいろなものを集めてきています。一番古いものだとナウマン象の顎の化石や歯の化石、そして一番最近だと日用のプラスチック雑貨、あと戦時中のいろいろな武器や江戸時代の古銭、また沈船なども海の中に入っています。瀬戸内海というのは昔から潮の満ち引きだけでエンジンがなくても西に東に移動できる水道みたいなものでしたから、多くのものが大陸から都に運ばれている水路でもありました。沈んでいるものを見ると博物館のように様々なものが検証できるのですけれども、そういうものを拾い集めて、船の中に展示をしている作品となります。



RE-ING-A 日比野克彦

もう一つ作品として、これは海の中に沈んでいたレンガの運搬船から拾い上げたレンガを使って象のシルエットを作っている作品になります。『RE-ING-A』という作品ですけれども、海の底から拾い上げてきたもので過去の事とか昔の営みのことなどを想像するというような活動をしています。この地域の漁業の人たちさえも知らないことがたくさんあって、アーティストと一緒にあって、新たな価値を見出ししていく。僕なんか海の底に潜ってレンガとか拾ってくると、漁師に「もうちょっと食えるもの拾ってこい」と叱られるのですけれども、こういうレンガにすると「そういうものか。ただの邪魔なものだけだと思っていた」と、いろいろな価値が変わってくる。

アートによって
地域の特性が価値化され、
コミュニティが形成される。

→社会的課題の解決につながる

アートによって地域の特性が価値化され、コミュニティが形成されていく。新潟とか瀬戸内ではこういう事例が多く出ております。社会的課題の解決に繋がっていると。

美術館展示→検証・アーカイブ

地域芸術祭→実践・プロセス

アートの社会での役割は？

物の展示から人との繋がりへ・・・

まとめますと、美術館での展示というのは大変貴重です。過去のものをしっかりと来世、次世代に繋げていく。しっかり収蔵していく。保存し修復し、次の世代に伝えていくというアーカイブ。それによって、時代、現在を検証していく。一方、地域の芸術祭、これは実践であり、そしてプロセスであります。一緒になってプロセスを作っていくところが地域の芸術祭の特徴であり、この二つを比べていくと、ア

ートの社会での役割が少しずつ変化している。ものの検証的な展示、鑑賞的な展示からプロセス、人と人との繋がりというものがアートの役割としてプラスされてくる。決して美術館の展示がなくなるわけではなく、その価値の大切さというものは揺るぎはないのですけれども、いわゆる美術館での展示だけがアートの役割ではなく、地域の中にある様々な価値を見つけ出していくということがアートの力によって、アーティストの力によって、そしてそれを繋ぐコミュニケーター、先程言った「こえび隊」のような地域を繋ぐ役割の人を介して、人と人との繋がりの中から地域の魅力というものが浮かび上がってくる、そんなプロセスという部分でのアートの社会的な役割がしっかりとプラスされてきたということになるかと思います。

芸術(学問的)

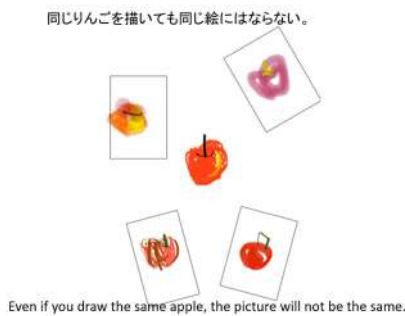
そもそもアートって何？

アート(日常的)

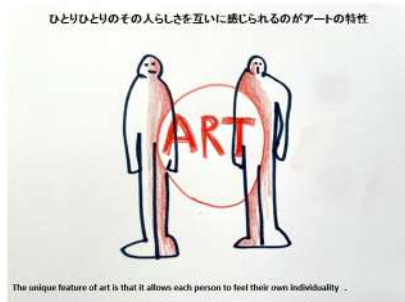
ART(人間的/根源的)

そういうアートの役割がいろいろありますが、そもそもアートって何か。広げれば広げるほどアートってとても高貴なものになってくるのですけれども、日本語って便利なもので、アートという表現も知らない間に三つ使い分けをしている気がします。芸術と使ったり、アートと使ったり、アートという表記をアルファベットで書いたり、微妙に使い分けています。

芸術というと、とても学問的なアカデミックな雰囲気を醸し出している。でも、アートとカタカナで書くと、もうちょっと軽やかに日常の中にあるものがアート、そしてその両方を合わせたような、アルファベットで ART もしくは ARTS と書くと、もっと何か根源的なイメージというものを持っている。ですので、日本語、日本人の思想、言語から思想は生まれてくるので、我々日本語を使っている・日本語を母国語とする人たちのアート・芸術をとらえるときには、芸術という漢字2文字とアートというカタカナと ARTS というアルファベットというときの距離感・雰囲気が違うということが、日本語を母国語している人たちの感性としてはあるのかなと思います。



画用紙をもらって 30 分ぐらいでりんごを書いて、みんなが「できました」となったら、「それでは見せてね」とここにりんご 100 枚の絵を並べたとしたら、当たり前ですけども、同じ絵は 1 枚もないというのは、我々はわかります。同じ絵は 1 枚もないよねって。「何でないの」って、それはそうです、絵を描けば同じようにはならないでしょう。これがアートの特性なんです。同じものにはならない。例えば、A さんが描いたりんごがある。B さんが描いたりんごがある。そしてその人物が「自分が描いた絵ですよ」と持っている。何となく A さんの描いたりんごは A さんと似てるかもね、やっぱり B さんの描いた絵は B さんっぽいねというようなことを連想することもある。例えば C さんが、「いや、俺の方が正解で A と B は間違っている」とは言わないわけですね。みんなバラバラで当たり前だし、そりゃそうでしょうということ。一人一人が違って、人の違っていているということを受け入れる。それがアートの特性としてあります。答えはないですし、私の方が正解であなたの方が間違っているから私のようになった方がいいですよというふうにはならない。同じりんごを描いても同じ絵にはならないということがアートの特性の一つです。



しさとか、その特性というものがふわっと浮かんできた。そこにアートの特性というものがあるのではないか。一人一人のその人らしさを互いに感じられるのが、アートの特性と言えるのではないかと思います。

もう一つ、社会的な課題を解決することにアートの役割が変容しているというお話の部分で、具体的に「なるほど」という例を挙げさせていただくと、例えば今日ここに 200 人ぐらいの参加者の皆さんがいらっしゃる。それから、オンラインでも、今日は 600 人ぐらいの方々が見聴されていると聞いています。みんながりんごをお絵描きしましょうということで、一つりんごを 10 人、20 人、100 人で囲んで絵を描く。

アートって描いた絵がアートなのかというふうに考えますが、そうではなく、描いた絵がアートというよりもむしろ比べたときに違いがあるということ。自分らしさ、あなたらしさ。らしさというのは一人でいてもらしさはわからない。自分らしさって当然自分も一番よくわからなくて、「それって日比野らしいよね。」、「えっ、そうなの？」と、人から言われて初めて気が付く。いわゆるその人と人之間にあるらしさとか、その特性というものがふわっと浮かんできた。そこにアートの特性というものがあるのではないか。一人一人のその人らしさを互いに感じられるのが、アートの特性と言えるのではないかと思います。

アートにはわからない事を受け入れる力がある。



とはいえ、アートって何かわからないよな、そんなこと言われたってわからない。アートってわからんという人がほとんどです。逆に、「いや、俺アートわかるよ」という人を聞いたことがありますか。もしいたとしたら、「お前、怪しいな」、「アートがわかるって、それどういうことよ」と言います。つまり、アートというものは「わからない」という言葉が似合うのですよ。どういうことかという、アートにはわからないことを受け入れる力があるということです。今は、わからないということに対して、調べれば何でもわかるのだから調べてこいよということになります。調べれば必ずわかる。まして AI とかに聞けばすぐに最適解を出してくれるだろう。わからないということ放っておくならば、それはお前の怠慢だとかよろしくない。お前の評価が落ちるぞみたいなことになります。わからない=罪、評価に値しないというようなことが切迫感として感じられる世の中になりつつあります。わかるまで調べる。調べれば必ずわかるようになるという方向性がある。そんな中で、今日の社会教育もそうだと思いますし、この後の東京藝大のお話し、役割もそうですけれども、こういう時代だからこそ、アートの役割が大変大きくなっているし、アートというものに対しての価値が必要になってきている。

その背景には、わからないということに対しての否定がある。わからないってことに対してのよろしくないという評価。そうではなくて、アートというものにはわからないことを受け入れる力がある、その特性がとても必要とされてきているのが現代ではないかと思っております。



社会的な課題を解決するということで、最近あまり言われなくなってきましたけれど、いわゆる SDGs。とても重要な 17 のゴール。持続する地球を築いていくには柔軟な目標が必要であるということが言われてきています。そこにアートがしっかりと関与していくということのマークがこのマークです。まさにこの真ん中のわからない色。何色なの、これって？ふわふわとしていているところ。いわゆる 17 のゴールというのは教育であったり、人権であったり、環境であったりということで、しっかり数値化して数値的な目標を立てて、2030 年までに何%とか、この数値を目標値として立てます。17 のゴール。数値化の役割はとても重要で、気付きを与えてくれます。「そんなにひどかった？」、「このままだと数十年後にそうなっちゃうの？そりゃ大変だ」と、具体的な気付きを与えてくれます。そして行動のきっかけには、数値はとても重要であります。

次にそれを継続していくときには、例えば、目標を達成したとしても、継続していきたい、地球の環境を、人権を、教育を、本当にやっていきたいという自分事として心を動かしていかなければ

ならない。心が動かないと継続する力にはならない。数値的な目標で評価ということだけの目的ではなくて、自分の心が動いてこそ継続する。心を動かすという力がどこにあるかというところ、アートが最も得意とするところ。心を動かす。心を動かすことによって17の目標が全て連鎖しながら継続していくことができる。ネクストSDGsのとても重要な力の根源には、やはり人の心を動かすアートの力が必要だと考えております。

これは東京藝大がSDGs社会的な課題に取り組むにあたって掲げているマークです。「17の素には芸術がある。」というコピーで、様々な社会的な課題に取り組むときの一つのアイコンとしております。

芸術未来研究場

社会とアートを繋いで
社会的課題に取り組む実践の場

そしてこのアイコンの下、東京藝大が3年前に芸術未来研究場というものを作りました。社会とアートを繋いで社会的課題に取り組む実践の場、研究所の「所」が運動場の「場」になっています。「閉ざされた所」ではなく、「開かれた場」というイメージで芸術未来研究場を作りました。



「芸術未来研究場」の概要

- (1) 東京藝術大学の中長期的なビジョン
- (2) 芸術未来研究場の概念図
- (3) 芸術未来研究場の各横断領域における取組
- (4) 共創を促す物理的な芸術未来研究場(イノベーション・ commons)の整備
- (5) 芸術未来研究場を学内外により一層接続・発信するための取組・仕掛け
- (6) 課題：アートによる社会的・経済的インパクトの測定・証明

東京藝術大学の中長期的なビジョン

東京藝術大学のミッション(「使命」より抜粋)
心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

第4期(2022~2027年度)中期目標・計画の基本方針(抜粋)
これからの世界・社会においては、創造性や感性などの人ならではの力、アーティストの役割が益々重要になるため、アートの力による、または、アートと異分野との融合による、社会的課題の解決に係る教育研究・社会実装を全学的に推進し、SDGsの達成やSociety5.0への転換、Well-beingの実現、イノベーションの創出、地方創生などに寄与・貢献する。



NEXT SDGs

一人ひとりの「こころの豊かさ」への眼差しを中心・根幹として現在のSDGsを拡張させ、17のゴールの垣根を融かし、異なる専門性や科学技術との融合による研究開発、イノベーション創出、地域に根差した課題解決や社会実装を目指す。

芸術未来研究場ですが、東京藝大の中期的なビジョンとして、現在第4期、6年間のうちの4年目ですが、その基本方針として立ち上げ、推進しているところです。心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す。芸術をもって社会に貢献していくということ、Well-beingの実現、イノベーションの創出、そして地方創生というものをアートの力でやっていると、一人一人の心の豊かさへの眼差しを中心にして、根幹として、SDGsを拡張させていくことを目指しております。

芸術未来研究場の取組③：アートDX領域(芸術情報センター アートDX専門部会)

デジタル技術やICT技術を使い、アートの社会的価値を最大化することによりWell-beingな社会の構築を目指し、デジタル分野の研究・教育を推進する。

- アート×デジタル、テクノロジーの研究推進
- Web3.0時代のウェルビーイングに資する社会連携・共創
- デジタル時代のアーティストに必要な教育(工学×芸術)
- 機材・スタジオなどの研究環境・教育環境の整備・運用

デジタル教育の生態

- ゲーム制作実習の授業から実習まで
- 制作と体験の統合(AR/VR/エディタ)
- 「DX」の活用
- デジタル分野における社会連携
- 「DX」の活用
- 「DX」の活用
- 「DX」の活用

XR/VR研究(ゴーグルレスVR, IAXAとの共同研究)

- ・IAXA型の人型ロボットを用いた没入型VRの研究
- ・IAXA・IAXA+Paragonによる共同研究
- ・IAXA+IAXA+Paragonによる共同研究
- ・IAXA+IAXA+Paragonによる共同研究

ゲームコミュニケーション研究室

- ・ゲームアプリを用いた没入型VRの研究
- ・没入型VRを用いた没入型VRの研究
- ・没入型VRを用いた没入型VRの研究
- ・没入型VRを用いた没入型VRの研究

そしてアート DX 領域。AI の話などが出てきております。来年は映像研究科の中にゲーム専攻が立ち上がります。正式な名前は『ゲームアートインタラクティブ専攻』なのですが、AI・生成AIなど、そしてゲームというエンターテインメントなものを表現の中にどう生かしていくのか。また、そのリテラシー。そしてバーチャルな世界の遠隔医療的なもので、医学とバーチャル空間というようなものもアート DX の中で研究していくこととなります。

芸術未来研究場の取組④：キュレーション領域(キュレーション教育研究センター)

歴史的、伝統的なキュレーションの概念や役割とともに、現代社会の課題を反映して多様化する「キュレーション」に取り組む教育と研究の場。

対話と協働を通して芸術と社会のさまざまな関係性を紡ぎ上げるキュレーションをはじめ、**美術のみならず、音楽やパフォーマンス・アート、私たちのあるべき未来の姿をキュレーションする**など、領域横断的に人材の育成と研究を行う。

今日の社会は、地球規模での気候変動、パンデミックや戦争、新自由主義などの激変的な要因から至るところで分断と障壁が生じています。このような困難な時代において、アートを通して世界の異なる人々の歴史、文化、生活を結びつけ、これからの共生社会の姿を照らし出し、紡ぎ出す「キュレーション」の力こそが、いま、求められているのではないだろうか。

具体的取組

教育活動(全学的な授業科目の開講)

- ①現代美術キュレーション概論
- ②パフォーマンスアート・キュレーション
- ③展覧会設計実習 I
- ④展覧会設計実習 II
- ⑤アートプロジェクト 音楽×身体×福祉
- ⑥アートプロジェクト IDAYパフォーマンス表現場

社会人向け講座の設置

リスニング：社会人、ビジネスパーソン

ゲームの企画・制作への応用

2023年度は上記の①②③④の授業を対象に(社会人は有料)。

リカレント：専門家のスキル向上

美術系の学生を対象とし、現代的な様々な課題を念め、専門的な知識やスキルをアップデートする講座を検討。

キャリアシフト：卒業生

卒業生のキャリア支援、キャリアシフトを支援。

国際的なネットワークハブの構築

アジア圏におけるキュレーター人材の不足、教育の充実を図る。国際的なキュレーションの動向、スキルを備えた人材の育成・輩出。(Shared Campusとの連携)

政策提言

学芸員課程とも連携し、美術作品や関連資料の収集と整理、保存管理に際する職業課程や専門性について問題意識を醸成し、政策提言を行う。

広がりが：領域・分野を超えて、日本・世界と

深く：専門性、新たな領域

キュレーション領域。社会人リカレント教育を藝大もここ2~3年で増やしてきています。科目を作る度にあつという間に定員が埋まってしまい、需要があるので、今後も増やしていきます。いわゆる下から学部・大学院・博士というコースではなく、一度社会に出てから、しかも藝大や芸術系じゃない大学を出て実践された上に、もう一度、一人一人の特性を受け入れることができるアートというものをベースとした学びをしていこうという、いわゆるリカレント、社会人が履修できる科目、そういうものをキュレーション教育センターの中では数多く増やし、例えば丸の内では三菱地所さんと一緒にやっていると、いろいろなまちづくり関係の方たちと一緒にやるということも盛んに行っております。

「芸術未来研究場」を学内外により一層接続・発信するための取組・仕掛け

■「I LOVE YOU」プロジェクト

- ・芸術が持つ無限の可能性を社会に向けて伝え、実践によって示すために、2020年度より**毎年度実施している企画公募事業**。
- ・2025年度の「I LOVE YOU」プロジェクトを、「芸術未来研究場が主催する共同研究企画公募事業」として実施し、「アートDX」と「ケア、コミュニケーションの研究領域」で学内の教員・若手研究者・学生から企画を公募。
- ・2つの領域に申請された41件の企画のうち27件を採択し、採択者には研究助成金を付与。(各学部・研究科に所属する若手研究者や博士課程の学生等が、芸術未来研究場に横断的に参加し、研究・実践・交流を行う)

■「芸術未来研究場」展

会期

- ・2025年11月21日(金)~11月30日(日)
- ・11月20日(金)にはプレスツアー/レセプションを実施。

会場

- ・東京藝術大学 大学美術館 本館3F 展示室3,4

概要

- ・**芸術未来研究場全体のビジョンを学内外に発信する。**
- ・各横断領域の取組や成果を展示/パネル紹介する。
- ・I LOVE YOUプロジェクトの採択企画も参加/出展。
- ・シンポジウムやワークショップ等も期間中に開催。
- ・芸術未来研究場を紹介するパンフレットを配布。

参考(アートによる社会課題への取組に関する過去の展覧会)

TURN on the EARTH 展
2020年7月23日 - 9月6日

SDGs x ARTs 展
2021年7月22日 - 8月31日

芸術は人を愛する

そして、芸術未来研究場の発信ということで展覧会を毎年やっています。11月に2週間ぐらい、東京藝大の美術館でやりました。今年で3回目。毎年11月には「芸術未来研究場」展、いわゆる六つの領域の活動を可視化して、イベント、トークショー、シンポジウムなども行います。マッチング的なプロジェクトもその中で行っており、例えば東京科学大学の研究と藝大との研究をマッチングしていこうとか、最近ではみずほホールディングスさんと一緒にやるとか、あとゴールドマンサックスさんとかサイバーエージェントなど、企業と一緒にアートを使った次世代の表現とか、そしてそれぞれの会社の中でのアートを使った役割を増やしていくようなことを、この芸術未来研究場の中で、そして

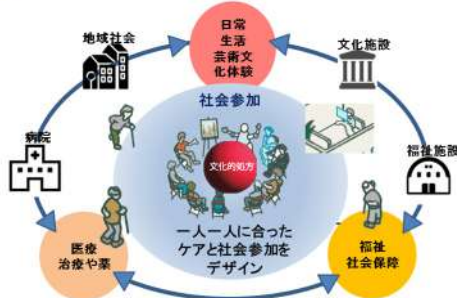


この中でキーワードとして藝大が発信していることが、「文化的処方」というキーワードになります。「文化的処方」です。

医療では、お腹が痛くなったらお医者さんに行き治すという行為が発生します。薬をもらうとか外科治療するという、真ん中の健康というものを目指すには、薬をもらったり、病院に行ったりして治すということを行います。この他にもう一つ、社会的処方という、いわゆる社会の中での暮らしぶりについてです。一人だと人間はなかなか生きていけない。社会的処方、コミュニティがあるからこそ人間は生きていけるという言葉があります。

社会的な処方と医学・薬学的な処方によって心身ともに健康を目指していく。その社会的な処方のもう一つ根源的なところで、「文化的処方」というものを藝大で開発しております。文化的な処方というものが一体どういうものになっていくのか、研究場の中でいろいろな意見を言い合っているとこになります。

アート活動と医療・福祉・テクノロジーを組み合わせ、その人がその人らしくいられるレジリエントな場所やクリエイティブな体験を「文化的処方」とします。それを地域社会の中に浸透させることで、人々が社会に参加するための新しい「回路」を開きます。



例えば、一人の人がいます。その人が高齢者になりました。福祉にもそろそろ行こうかなというところ。持病があってお薬ももらわなくてはいけないなというところにプラスして日常生活の中での文化体験というものも当然社会的な処方となります。そして文化と接するという文化的な処方というものも医学的なものと同等に重要である。関係性としてあるということをしかりと証明していこう、エビ

デンスをつけて証明していこうというようなことについて、今、動き始めました。ですので、一人の患者さんやクライアントに対して、福祉、医療、文化施設というものが情報を共有して、例えばマイナンバーカードの中に文化的な活動はどういうものをしているのかというデータも今後入っていく、薬などの個人のデータの中にその人のコミュニティがあるとか、こういう文化活動をしているとかというようなことも入っていくことによって、その人のより良い生活というものをもみんなで情報を持ち合い、対応していく。

医学ではお腹が痛くなってから、病院に行く。人間ドックという未病というものもあります。文化的処方に関しては継続が力になります。小さい頃から、地域の中で、常日頃から文化と接すること、美術館に行くことだけが文化じゃないという話は先程の地域での芸術祭の話の中でありましたけれども、文化的な感覚、多様性を認め合う感覚、自分らしさというものを見つける力

というようなものが日常の中にあるという文化的な活動と相まっていく、というのが「文化的処方」の目指すところです。



この文化的な処方に対していろいろな自治体
が関心を持ってくださっております。文化的な処
方というものをしっかりと作り上げて、心の産
業というものを作り、社会的な課題を解決する
アートに対しての支援をするエコシステムをし
っかり作っていくことを目指しております。

国民文化祭にて 文化的処方プログラムを展開

2023年石川県 金沢大学×東京藝術大学
2024年岐阜県 岐阜大学×東京藝術大学
2025年長崎県 長崎大学×東京藝術大学
2026年高知県 高知大学×東京藝術大学
2028年愛媛県 愛媛大学×東京藝術大学

そういう活動をどんどん広めていく場として、
国民文化祭というものがあります。今年は長崎で
先月開催されました。その前は岐阜県。その前は
石川県、そして来年は高知県、そして1年おいて
28年は愛媛県で国民文化祭が行われます。この国
文祭の中で東京藝大は、各県の国立大学と連携し
て、文化的処方プログラムというものを開催して
きております。

文化的処方・文化リンクワーカーを国民文化祭のレガシーに！

2023年の石川県国民文化祭では、本学の企画で文化的処方をテーマにフォーラムを開催し、2024年の岐阜県国民文化祭では、岐阜県美術館を拠点にすでに育成されているアートコミュニケーターが文化リンクワーカーとして市民とプログラムの橋渡しを担うことを検討しています。



研究開発課題1 国民文化祭などを通じた石川県との連携

国民文化祭「いしかわ百万石文化祭2023」の応援事業として子ども向けのフォーラム「アート・子ども・障がい～文化的処方とは～」を2023年11月12日に開催



研究開発課題2 国民文化祭などを通じた石川県との連携

2024年1月には「ミライへ繋ぐ音楽会～障がい者支援ワークショップ＆コンサート～」を開催し障がいのある小・中・高校生が音楽と映像で子どもたちの可能性を広げるプログラムを実施した。



研究開発課題3 「清流の国ぎふ」文化祭2024 文化的処方プログラム 文化リンクワーカー育成

岐阜大学アスナビル3F 文化リンクワーカー育成講座



これは今年作った資料で長崎までしかないですけれども、石川県からスタートしました。きっかけは23年のときに「来年、岐阜県で国民文化祭がありますよ」ということで、私が岐阜出身で、この国民文化祭の中のプログラムを作る委員会の仕事もしており、ぜひ藝大が開発している文化的処方というものを国文化祭の中で実践していけないかということをご提案させてもらい、23年のときに文化的処方というものの頭出しのシンポジウムをしました。

文化的処方とは何なのかというシンポジウムを石川県で行い、音楽と映像を体験するというようなワークショップなども開き、そして昨年の岐阜での国民文化祭においては、文化的処方を実践する文化リンクワーカー育成講座というものを一緒になってスタートさせました。

薬剤師が薬を処方するように、文化的処方を処方する文化リンクワーカーを育成する。

今日はお話しする時間がないですけれども、この文化リンクワーカーを育成するベースには、先程の「こえび隊」のときにコミュニケーターという言葉をごちゃごちゃと言いましたが、アートコミュニケーター事業というものをここ15年ぐらい各美術館で行っています。スタートは東京都美術館と東京藝大が連携したもので、美術館で展示している展覧会をいかに魅力的に楽しく見てもらうかというようなことを考えるアートコミュニケーターというものを一般市民、都民から募って、育成していくというアートコミュニケーター事業、それがベースになってアートコミュニケーターを経験した人を今度は文化リンクワーカーに育成していくということを岐阜県美術館と岐阜県と連携して行ったのがこの24年になります。



7月15日国民文化祭100日前イベント
(岐阜市・Gテラスにて)

全10回の育成講座を終了し、認定証を発行された文化リンクワーカーは国民文化祭100日前イベントにてデビュー。イベントでは実際に参加者の興味関心などをヒアリングし、担当した相手に合わせた国民文化祭事業のイベントなどを文化的処方箋として提示した。



長崎県での文化的処方プログラム
長崎県五島列島×離島医療×アート

https://www.pref.nagasaki.jp/s_hared/uploads/2025/11/17624_26779.pdf

これは文化リンクワーカーの1期生の10何名かな。15名ぐらいが最初の文化リンクワーカーになり、今年も岐阜県では文化リンクワーカーの育成を続けております。こういう連携の中で長崎県でも文化リンクワーカーの育成を行い、展開しております。

文化芸術による地域づくりフォーラム。これは五島列島で行いました。遠隔医療の長崎大学のチームと一緒に社会課題、遠隔の離島医療問題。そこと文化的処方を繋げていこうということで、文化芸術による地域づくりフォーラムというものを国民文化祭期間中に長崎大学と一緒にやりました。

アートコミュニケーター事業 とびらプロジェクト

東京藝術大学×東京都美術館

<https://tobira-project.info/about/>

2012年からスタート



アートコミュニケーター事業について、こちらをご紹介します。2012年からスタートしております。東京美術館と今でも続けております。「とびらプロジェクト」という名称で展開しています。ぜひ後でじっくり見ていただければと思いますけれども、アートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト。この「とびらプロジェクト」は毎年30名ずつ公募して、3年間の任期で活動してもらっています。ですので総勢100名ぐらいが常時います。美術館というものをステージにして、来館者と一緒になってアートを使った様々なワークショップ・講座などを自分たちでアイデアを考えて実践していくものを行っています。東京藝大のスタッフが東京都美術館に勤めていて、美術館のアートコミュニケーター事業の人たちと一緒にやっております。10何年目ぐらいです。ここの成功事例から、各地域の美術館へコミュニケーター事業というものが展開し、岐阜県美術館も東京都美術館の7、8年後ぐらいからできております。

最初に美術館の役割と地域の芸術祭の役割というお話をしたときに、美術館というのはアーカイブと検証することに適しているというお話をさせていただきました。比較する上で、極端にお話ししたのですが、美術館でさえ、地域との交流コミュニティづくりというものが求めら

れている時代になっています。

世界美術館会議、ICOM というものがありまして、京都大会が5～6年前にありました。その会議の中で美術館の定義はアップデートされるのですね。そこでアップデートされた美術館の定義には、美術館の一番の本望である作品をきちんと継承し、次世代に伝えていく。そして市民に対して、アートをきちんと鑑賞する場を提供するというものもあります。さらに、その共同会議の中では、地域のコミュニティの場として活動するというものがプラスされました。地域らしさというものを出していく場としても、美術館というものが機能していくべきであるという、近年そういう考え方にもなっており、それに即してこのアートコミュニティ事業というものも全国に広まっております。

ですので、今日はオンラインも含めて全国から社会教育の関係者の方々が見えているかと思えます。私は、今、東京藝大の学長と、熊本市立現代美術館と岐阜県美術館の非常勤館長の仕事をさせていただいて、藝大の教育研究機関、そして実践の場である美術館のエリア、そして岐阜県美術館ですと岐阜県と、熊本市現代美術館ですと熊本市と、という自治体との連携、大学と文化施設と自治体という連携を繋いで社会教育、まちづくり・人づくりというものを行う。その大きなスタートのきっかけとなったのはアートコミュニケーション事業。ここから様々なものが進化、発展、変容してきているという実感はあります。

アートまるケット

岐阜県美術館

<https://kenbi.pref.gifu.lg.jp/exhibition/artmaruketto/>

そして岐阜県美術館のアートまるケット。こちらも同じようにアートコミュニケーター事業としてアートまるケットを行っております。後でチェックしてください。

アートと科学技術による
「心の豊かさ」を根幹とした
イノベーション創出と地域に根ざした
課題解決の広域展開

香川大学×東京藝術大学

<https://www.tua-kagawa.com/>
<https://setouchi.ac/>



地方自治体との連携の中で近年力が入り、いろいろなステークホルダーが絡んでいるものとしては、香川大学と東京藝大の取り組みがあります。その背景には、先程ご紹介した瀬戸内国際芸術祭があります。香川県が行ったアートによる地域づくりというものが背景にあり、その中で、香川大学は工学系の強い大学でしたけれども、文化系、創造系、芸術系の学部を作ろうということで創造工学部というものを立ち上げることになり、その際に藝大との連携をやっているというこ

とで、「アートと科学技術による『心の豊かさ』を根幹としたイノベーション創出と地域に根ざした課題解決の広域展開」ということで行っております。

これは地域中核の助成を受けて、スタートしました。今年で2年目か3年目です。科学とアート。地域との連携。そして教育。中学生、高校生たちとのサマースクールを地域で展開しています。地域の特性や一人一人のその人らしさというものをアートは抽出することが得意であるというならば、今、地方創生という言葉が日本中でうたわれていますが、地域らしさを出すときに、アートがそれぞれの地域にどんどん広がっていくべきだろうと思います。

日本には国立の芸術大学は一つしかない。それがヒエラルキー的に見えるという時代から、47都道府県に国立の芸術機関、教育機関があつていいのではないかというビジョンで、東京藝大分校プロジェクトというイメージを持ち、最初にスタートしたものがこの瀬戸内でした。今は名前を変えて分校プロジェクトからいろいろ展開しております。プログラム数が多く、盛んに行われておりますので、ぜひ香川のオンラインで聞かれている方とか、今日会場に来ている方、来週また私も香川に行くのですけれども、継続して行きますのでぜひ参加してください。

それから、話の中で、藝大にいろんなステークホルダーが増えていきますよと述べましたが、みずほ銀行という名前も挙げさせていただきました。きっかけは東京の本店ですけれども、今、みずほ銀行高松支店との連携で、銀行の中に展示をしたり、銀行の行員がアートプロジェクトと一緒に参加したりというようなこともしております。

TURN PROJECT

<https://turn-project.geidai.ac.jp/>



TURNは、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などによる違いや共通することと向き合い、一人ひとりのその人らしさを見出していくアートプロジェクトです。

そしてTURNプロジェクト。こちらをご紹介します。こちらは主に福祉系の活動になります。福祉とかマイノリティの施設にアーティストが赴いて活動をし、そこでの成果物を世の中に発信していく、マイノリティの価値を発信していくという活動がTURNプロジェクトです。

「障害の有無、世代、性、国籍、住環境などによる違いや共通することと向き合い、一人ひとりのその人らしさを見出していく」アートプロジェクトです。まずは東京都と一緒にスタートしました。藝大は主に海外展開を担当して、今でも続けております。ついこの間もアルゼンチンのろう者の施設に藝大卒業生の陶芸家のアーティストが行って、一緒に活動をし、それをブエノスアイレスと発表し、今度東京でもその成果を発表していきます。TURNプロジェクトというのものも、南半球ビエンナーレフルに招聘されたプログラムになっていまして、まさに国籍を超えてそれぞれの地域らしさを発信していく。障害というのものも何をもって障害かということも、障害の意味も取り直すような活動になっています。

アートは生きる力

ということで、大体紹介いたしました。「アートは生きる力だ」ということで、今後も様々な機関と連携しながら、そして人材育成しながら、リカレントも含めていろいろな社会の人たちと協働しながら、自治体・企業などとも連携して進めていきたいと思っております。

おまけ



100の指令

口の中をペロで触って
どんな形があるか探ってみよう

おまけですけども、最後に簡単にワークショップをします。人間の想像力というものいろいろある。その中で僕が「100の指令」という本を90何年に出しました。これは言葉しかない、言葉しか書いてない、言葉だけが書いてある本なのですけれども、例えば「口の中をペロで触ってどんな形があるか探ってみよう」。皆さん、今でも口の中でやってもらえればできると思います。オンラインで参加されている方々もやってみてください。口の中に歯があったり、あごの裏があってほっぺたの柔らかいところがあったり、最初に僕がやったのは視覚障害者とのワークショップでした。

口の中というのは視覚に障害のない人でも見ることはできないので、どうやって視覚障害者と視覚障害のない人たちが同等に何か物を作ることができるかなと最初に考えたキーワードで、これは日頃の中でも口の中を想像したことはないのだけれども、ペロで触るといろいろな形が見えてくるなど。拍手をするとなぜ音が出るのだろう。拍手でいくつの音が出せるか試してみよう。何でこういう音が出るのかなみたいなの。

拍手をすると
なぜ音が出るのだろうか
拍手で幾つの音が出せるか
試してみよう

1は何色だろうか？
3は何色だろうか？
8は何色だろうか？
数字と色をつなげてみよう。

あと、1って何色？2は何色？3は？8は？これは人によって違うのですよね。色感覚、あと日によっても違うかもしれない。「僕は3は黄色だな」、「いや、私は3はどちらかというともうちょっと緑かな」とか、そんな数字と色、そういう感覚というものをなんだか知らないけれども、持っている。

帽子の中に
秘密のことを書いた紙を入れて、
街を歩いてみよう。

「帽子の中に秘密のことを書いた紙を入れて、街を歩いてみよう」。なんとなくそわそわする。「木にとまっている鳥を自分と目が合うまで心で読んでみよう」。鳥、こっち向かないかな、みたいな。「洗濯物がいつ乾くのか？ときどき洗濯物を触ってみよう」。いつ乾くのかな。おうちにいて暇なとき「さっきより乾いてる」みたいな。「何か水分で蒸発しているのだな」みたいな。

木にとまっている鳥を
自分と目が合うまで
心で読んでみよう。

洗濯物がいつ乾くのか？
ときどき洗濯物を触ってみよう。

ガラスがなぜ透明なのか？
ガラスを触りながら
考えてみよう。

鉄棒に毛糸を巻いて
暖かい鉄棒を試みよう。

お風呂の中に入って
お布団の中を想像してみよう。

アートが社会の基盤になった世界を
想像してみよう。

「ガラスがなぜ透明なのか？ガラスを触りながら考えてみよう」。ガラスがなかったら大変困るのだけれども、なんでもものがあるのに透明なんだろうなというのを触りながら考えてみる。

「鉄棒に毛糸を巻いて暖かい鉄棒を試みよう」。鉄棒は冷たい。今の季節はなおさら冷たい。何となく巻かなくても想像できる。毛糸を巻いたらちょっと滑りやすい。でも暖かい感じがいいかなみたいな。

「お風呂の中に入ってお布団の中を想像してみよう」。お風呂の中に入って、お布団の中にいる感じ。

そして最後、「アートが社会の基盤になった世界を想像してみよう」。どうも、ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました。

調査研究報告「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究」

中間報告

志々田 まなみ（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部 総括研究官）

国立教育政策研究所 令和7年度教育研究公開シンポジウム

令和6～8年度
社会教育活動の実態に関する基本調査事業

「社会教育主事と社会教育士等の配置・在り方に関する調査研究」中間報告



国立教育政策研究所生涯学習政策研究部
総括研究官 志々田 まなみ

National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました国立教育政策研究所でこの調査を担当いたしました、総括研究官の志々田と申します。後半のシンポジウム前に少しだけお時間をいただきまして、『社会教育主事と社会教育士の配置・在り方に関する調査研究』の中間報告をさせていただこうと思っております。

本日の流れ

- 1 調査研究の背景
- 2 調査研究の目的
- 3 質問紙調査の概要について
- 4 質問紙調査の結果について
- 5 まとめ



この調査につきましては、多岐にわたる、しかも大規模調査となっておりますので、今からの15分間でお伝えできる範囲は限られますが、この後のシンポジウムの内容にも関係するところをピックアップしてお話をさせていただきたいと思っております。全体の流れはこのようなになっています。

National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center

1 調査研究の背景

【社会教育主事の配置に関する状況と活躍促進に関する基礎調査】
(令和5年度実施)

現在の各都道府県、市区町村の社会教育主事の配置状況、社会教育主事・社会教育士の活躍に関する実態等について調査
【対象】
・都道府県・市（区）町村教育委員会社会教育主管課長
・社会教育主事発令者（令和5年5月1日現在発令者）
・令和2～4年度に社会教育実践研究センターで社会教育主事講習を修了した方

【見えてきた課題】

- 各自治体の教育委員会事務局において、社会教育主事の有用性が理解されていない。
- 社会教育士が活躍できる環境が各自治体において、整備されていない。
- 各自治体の教育委員会事務局において、社会教育主事としての知見の蓄積ができていない。

National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center

本調査を本格的に始める前に、先行調査を令和5年度に実施しました。この中で、社会教育主事が配置をされていない自治体が増えている現状が改めて明らかになりました。改善策を検討するために、3点ほど研究課題を整理しました。第一に、社会教育主事の有用性が自治体内で理解されるためにはどのようなエビデンスが必要なのか、第二に、自治体内で社会教育主事の専門的な知見を蓄積するためにどのような体制が必要なのか、さらに

第三として、令和2年度から始まった「社会教育士」の称号をもつ人材が社会教育主事とともに活躍していくためにはどのような環境が必要なのか、という点です。なお、この時点では、社会教育士がどのような場でどんな活躍をしておられるのかといった基礎的な情報さえ把握できてい

ない状況にありました。

2 調査研究の目的

社会教育の担い手である社会教育主事・社会教育士について、社会教育主事の役割や職務、また、社会教育士への期待及び活躍状況等の実態を把握し、社会教育主事の配置の必要性や社会教育士の活躍場面等を明らかにする。

本日は、実態調査（質問紙調査）の結果について、人材ネットワークの状況を中心に報告します。



National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center 4

いても検討していくために、様々なデータを集めることにしております。

本日は特に、社会教育人材ネットワークに関する部分、ここが次のパネルディスカッションの話題の中でも肝になる部分ですので、この部分をしっかり取り上げてお話をさせていただこうと思っています。

3 質問紙調査の概要について

〈調査実施機関〉 令和7年3月17日～4月10日

〈調査の期日〉 令和7年1月1日現在 ※ただし、事業実施状況等については令和6年度

①都道府県主管課調査【調査票1】 〈回答数：47都道府県〉

対象：都道府県生涯学習・社会教育主管課（47都道府県）
回答者：1名（課室長級以上又は、課長補佐級）
方法：全数調査、任意調査

②市区町村主管課調査【調査票2】 〈回答数：591自治体〉

対象：市区町村生涯学習・社会教育主管課（912自治体）
i) 指定都市・特別区 43自治体
ii) 中核市・施行時特例市 85自治体
iii) 中都市（10万人以上） 122自治体
iv) 小都市（10万人未満） 276自治体
v) 町村 386自治体
回答者：1名（課室長級以上又は、課長補佐級）
方法：標本調査（サンプル調査）、任意調査

National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center 5

配布させていただきましたが、市区町村については数が多いので、地域性、自治体規模などのバランスを考慮し、抽出いたしました。912のうちピックアップした591の自治体からご回答いただいております。

そこで、社会教育の担い手である、社会教育主事の役割やその有用性、社会教育士に寄せられる期待や活躍の状況について、まずは実態をきちんと把握しようと、研究プロジェクトを立ち上げることにいたしました。今回の質問紙調査だけでなく、来年度はヒアリング調査もしながら、地域コミュニティの基盤づくりに向けた社会教育の在り方、さらに、社会教育主事や社会教育士といった社会教育人材の養成・研修、ネットワーク形成の在り方につ

実施しました質問紙調査ですが、令和7年の1月1日現在の状況をお尋ねしているところです。大きく5種類の調査を実施しており、どれだけ大規模な調査になっているのかわかっていたかと思えます。

まず調査票1は都道府県で社会教育を所管している部局の課長・室長級の皆さんに対する調査、調査票2は市区町村で社会教育を所管している部局の課長・室長級の皆さんに対する調査になっています。都道府県はすべて

3 質問紙調査の概要について

- ③都道府県発令者及び担当者調査【調査票3】 〈回答数：207名〉
 対象：都道府県生涯学習・社会教育主管課の社会教育主事発令者及び社会教育の事業を担当する者
 回答者：5名
 ※回答者優先順
 1 社会教育主事発令者
 2 学校教育との連携を担当する者（地域学校協働活動等）
 3 社会教育の事業を担当する者
 方法：標本調査（サンプル調査）、任意調査
- ④市区町村発令者及び担当者調査【調査票4】 〈回答数：1120名〉
 対象：②で対象となった市区町村生涯学習・社会教育主管課の社会教育主事発令者及び社会教育の事業を担当する者
 回答者：3名
 ※回答者優先順
 1 社会教育主事発令者
 2 学校教育との連携を担当する者（地域学校協働活動等）
 3 社会教育の事業を担当する者
 方法：標本調査（サンプル調査）、任意調査

さらに調査票3では、都道府県の社会教育主管課で職務を担っている社会教育主事、社会教育主事として発令はされていないものの社会教育事業を担当しておられる職員、こうした方たちの生の声を調査したいと考え、実施しました。調査票4は、同様の枠組みで市区町村の職員の皆さんに調査させていただきました。都道府県については207名、市区町村につきましては、1,120名の皆さんからご回答をいただいております。

3 質問紙調査の概要について

- ⑤社会教育士対象調査【調査票5】 〈回答数：121名〉
 対象：社会教育士の称号を取得されている方又は現在社会教育主事の発令がされていない社会教育主事講習又は社会教育主事養成課程修了者
 回答者：令和5年度に（社会教育実践研究センターで）社会教育主事講習[B]を修了した方
 ・社会教育士noteのリンクから回答できる方
 ・都道府県社会教育人材ネットワーク参加者等
 方法：任意調査

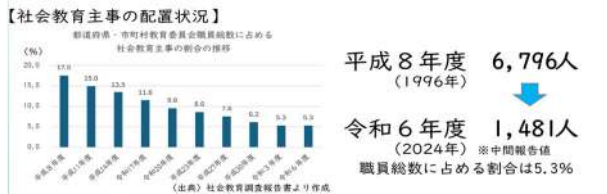


さらに調査票5は、社会教育主事ではない社会教育士の皆様の実態を明らかにしようと実施したものです。ただし、様々な大学や教育機関で養成されている社会教育士に調査を配布し、回収するというのは技術的に難しいのが現実です。そこで今回は、令和5年度に本センターの社会教育主事講習[B]を受講いただいた皆さんにご協力をお願いさせていただきました。加えて、文部科学省が編集をしております「社会教育士note」と

いうサイトでも協力をお願いかけまして、合計121名の社会教育士の皆様に回答いただきました。この5つの調査結果を、ぐっと絞ってお話させていただきます。

4 質問紙調査の結果について

- 【社会教育主事とは？】
 ○社会教育主事は、社会教育法に基づき都道府県・市区町村の教育委員会に置くこととされている専門的教育職員であり、地域の社会教育事業の企画・実施及び専門的な助言と指導を通し、地域住民の学習活動の支援を行う。
 ○そのほか、地域の学習課題やニーズの把握・分析、地域の社会教育計画の立案やそれに基づいた学習プログラムの立案、地域人材の育成、地域人材の把握、学校教育と社会教育との連携の推進、相談など、その職務は多岐にわたっている。 （出典）文部科学省ホームページ

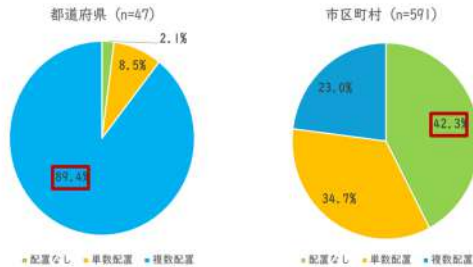


そもそも「社会教育主事とは何か」をごく簡単に説明すれば、社会教育法に基づき、都道府県、市区町村の教育委員会に配置されている専門的教育職員のことです。平成8年をピークに徐々にその配置数が下がってきており、社会教育に関わる皆さんの大きな懸念材料になってきました。実際、直近の令和6年度の社会教育調査の速報値を見ますと、平成8年のときは6,796人いた社会教育主事が、1,481人となっています。

4 質問紙調査の結果について

(1) 社会教育教育主事の配置状況（調査票 1、2）

**社会教育主事を複数配置している都道府県は約9割。
社会教育主事を配置していない市区町村は42.3%**



National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center 9

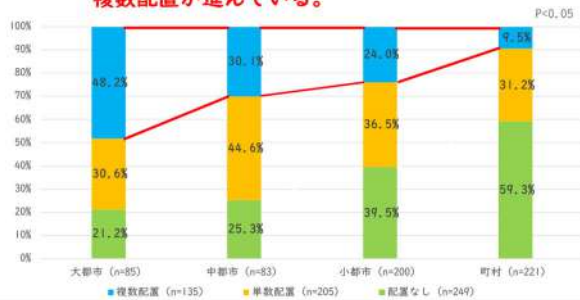
こうしたデータからもおわかりいただけるのではないかと思います。

4 質問紙調査の結果について

(1) 社会教育教育主事の配置状況（調査票 1、2）

【自治体規模別社会教育主事の配置状況（市区町村）】

**市区町村では、自治体の規模が大きいくほど、
複数配置が進んでいる。**



National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center 10

りづくりや関わりづくりといったことを強化していかなければいけないはずの小さな自治体の中で、実際には社会教育主事の未配置が進んでいるという残念な状況があるということが明らかになりました。

法令に準じて、社会教育主事の配置を強く求めていくことはもちろんのことですが、自治体ごとに社会教育主事を配置できない状況を把握する必要もあります。そのあたりは今後、ヒアリング調査で補っていく予定です。

様々な理由から行政内で社会教育人材の配置が手薄になりがちな状況があることを踏まえ、その一つの打開策として、昨今注目されている社会教育士の活躍促進に期待が集まることとなります。社会教育の土壌を耕していくためにも、社会教育士が活躍しやすい環境が一体どのようなものなのかということをしっかり議論にしていかなければならないということが、この結果からもよくわかります。

都道府県、市区町村での社会教育主事の配置状況をまとめたものがこちらになります。都道府県では約9割が複数名配置されています。1名配置のところも含めると、約98%の配置率です。一方、市区町村に目を向けてみますと、今回の調査では42.3%の自治体で社会教育主事が配置されていない結果となりました。1名配置が34.7%、複数名配置は23%という数字になっております。都道府県と市区町村の社会教育主事の置かれている状況には、大きな差があるということが、こ

小規模自治体からは「社会教育主事を配置できる余裕がない」という声を実際よくお聞きしますので、自治体の規模別に比較をしたのがこのグラフです。自治体規模が小さくなればなるほど、社会教育主事が未配置の自治体の割合が高くなっていることが、このグラフからわかります。人口減少、少子高齢化、地域コミュニティの衰退といったトピックスは、小さな自治体でこそ大きな問題になっていることです。社会教育による学び、そしてそれを通じた繋が

4 質問紙調査の結果について

【社会教育士とは？】

- 「社会教育士」は、教育委員会事務局に配置される「社会教育主事」になるための講習や養成課程を修了した者に与えられる「称号」です。社会教育主事にならなくても、その能力があることが分かるようにするため、令和2年4月に新設しました。※赤字、下線は作成者
- 講習や養成課程で取得した **コーディネート能力、ファシリテーション能力、プレゼンテーション能力**等を活かし、教育委員会のみならず、福祉や防災、観光、まちづくり等の **社会の多様な分野における学習活動の支援を通じて、行政や企業、NPO、学校等の様々な場で、人づくりやつながりづくり、地域づくりに中核的な役割を果たすことが期待されています。**

(出典) 文部科学省ホームページ

【「社会教育士」称号付与数】



社会教育士

令和2年度
(2020年) **706人**

↓

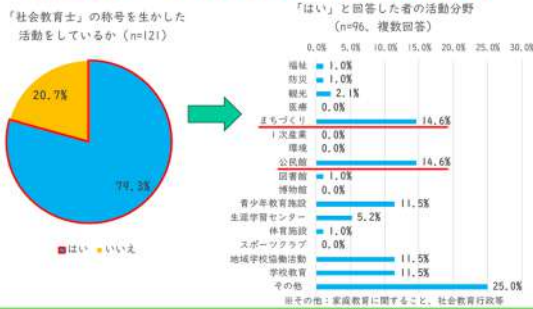
令和6年度
(2024年) **9,693人**

National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center

4 質問紙調査の結果について

(2) 「社会教育士」の活動状況（調査票5）

約8割が称号を生かした活動ができている。
活動分野は「まちづくり」、「公民館」が多い。



National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center

12

文部科学省の調査によりますと、令和6年までに9,693人の方が社会教育士の称号を名乗ることができるようになっていきます。

この方たちの中から、今回121名の皆様にアンケートのご協力をいただきました。この円グラフにあるように、約8割の皆さんから、「社会教育士としての称号を生かした活動ができている」と、積極的な回答が返ってきました。どんな分野で活動されているかを答えてもらうと、右側の棒グラフにあるように、まちづくりや公民館の活動が多い傾向にあります。

4 質問紙調査の結果について

(2) 「社会教育士」の活動状況（調査票5）

称号を生かした活動ができている要因として、68.0%が「活動の場がない」と回答



National Institute for Educational Policy Research, Practical Social Education Research Center

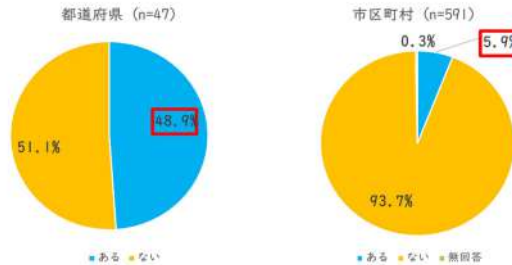
13

一方、称号を生かした活動がまだできていない2割の方に、なぜできていないかを尋ねてみると、「活動の場がない」という回答が7割近くになっています。まだ社会教育主事講習での学習成果や称号を活用できるような場面、場所に出会っていない方が少なからずいらっしゃる状況をうかがうことができます。

4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況 (調査票1、2) 【行政主導の社会教育人材ネットワークの有無】

都道府県の約半数に行政主導の人材ネットワークがある。
一方、市区町村は約6%

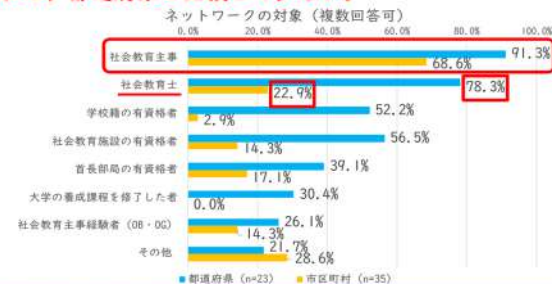


らですね。

4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況 (調査票1、2) 【社会教育人材ネットワークの対象】

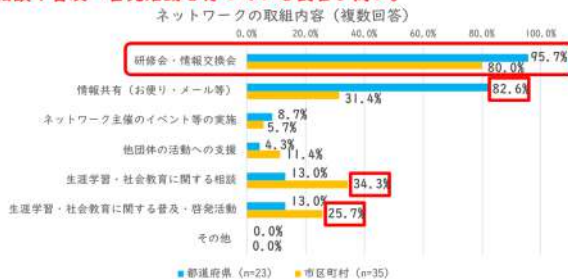
ネットワークの主な対象は、都道府県、市区町村ともに社会教育主事。市区町村のネットワークへの社会教育士の参加は、都道府県と比較して少ない。



4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況 (調査票1、2) 【社会教育人材ネットワークの取組内容】

ネットワークの主な取組内容は、都道府県、市区町村ともに研修会・情報交換会。都道府県では8割以上がメール等を通じた情報共有を行っている。市区町村では、都道府県と比較して、生涯学習・社会教育に関する相談や普及・啓発活動を行っている割合が高い。



いった活動が、都道府県より多く取り組まれていることがわかります。

実際に全国において、社会教育人材のネットワークがあるかどうかを調べた結果がこの図になります。都道府県や市区町村の教育行政が中心となって形成されたネットワークがあると回答した自治体は、都道府県で全体の約5割に達しているのに対し、市区町村では約6%と、かなり少ないのが現状です。やっと都道府県からネットワーク化が始まったばかり、といった状況だと思えます。市区町村については、まさにこれから

その社会教育人材のネットワークではどのような方たちを対象としているかを尋ねた結果が、このグラフです。都道府県のネットワークでは、社会教育主事や社会教育士を中心に参加されていることがわかっています。市区町村においても、社会教育主事や社会教育士が中心ですが、都道府県の結果よりも社会教育士を視野に入れたネットワークが少ないことがわかります。

こちらは社会教育人材ネットワークでの主な活動内容です。一番多いものが研修や情報交流会のような機会を作っているという回答で、ほとんどのネットワークで実施されている取組です。

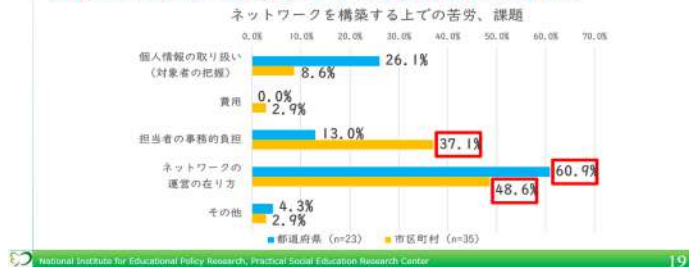
さらに都道府県の結果をみますと、お便りとかメーリングリストなど、ICTも活用しながら情報発信が行われています。一方、市区町村については、それぞれの生涯学習や社会教育活動の相談事業や、啓発活動を呼びかけていったりと

4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況（調査票1、2）

【社会教育人材ネットワークを構築する上での苦勞、課題】

ネットワークを構築する上での苦勞、課題として、都道府県、市区町村ともに「ネットワークの運営の在り方」と回答した割合が最も高い。また、市区町村は、担当者の事務的負担と回答した割合が都道府県よりも24.1ポイント高い。



のだろうと思います。

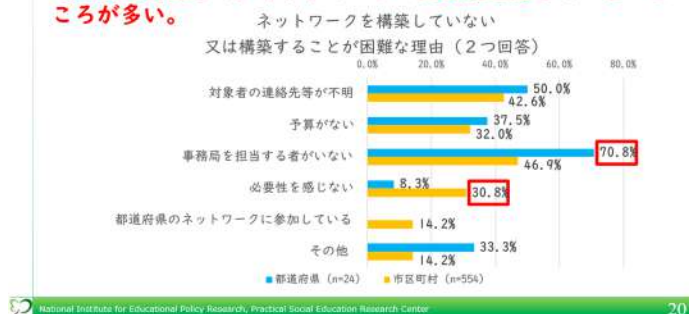
社会教育人材のネットワークを運営していく上での苦勞や課題を尋ねた結果、圧倒的に多かった回答が、「ネットワークの運営の在り方」でした。つまり、地域のどこで、誰が、どのように進めていくべきなのか、予算や事務負担も含めて、基本的な議論はまだ始まったばかりという状況がうかがえます。今後どのような社会教育人材ネットワークを作り上げていくのかということも、中教審も含めて議論していかなければならない

4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況（調査票1、2）

【社会教育人材ネットワークを構築していない理由】

ネットワークを構築していない理由として、都道府県は担当者の不在を課題に挙げているところが多い。市区町村は、都道府県と比較して、ネットワークの必要性を感じていないところが多い。



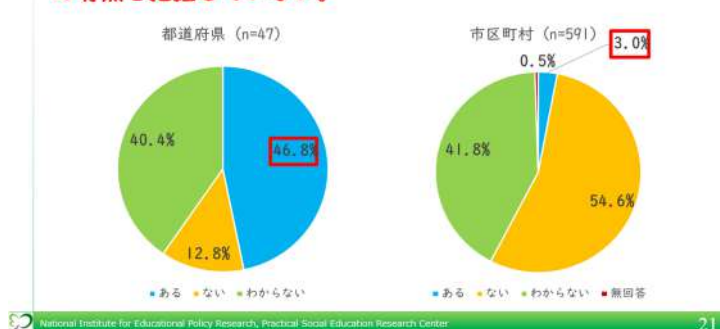
社会教育人材ネットワークがないと回答した自治体に対し、その理由を尋ねたのがこのグラフです。「事務局を担当する者がいない」が都道府県では圧倒的に多いです。また市区町村において、「必要性を感じない」といった答えが3割に上っていることは、見逃せない結果ではないでしょうか。社会教育人材のネットワーク化がなぜ必要なのか、そのあたりをもっとアピールしていく必要があるのではないかと考えております。

4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況（調査票1、2）

【自発的な社会教育人材ネットワークの有無】

自発的なネットワークの構築について、市区町村より都道府県の方が進んでいる。また、どちらも約4割がネットワークの有無を把握していない。



こうした自発的な取り組みを把握していることがわかりました。

もう一つ看過できないのが、都道府県においても市区町村においても、こうした自発的なネッ

行政が公式に作っているネットワークではなく、自発的な社会教育人材によるネットワーク、特に社会教育士として活躍したいと思ってくださっている民間の皆さんの自発的な研修会や交流会、情報提供活動が、全国で発足しているという情報を、私もいろいろな方面からお聞きしています。

こうした自発的なネットワークの構築についても調べてみますと、やはりここでも市区町村よりも都道府県で進んでいまして、4割の都道府県で

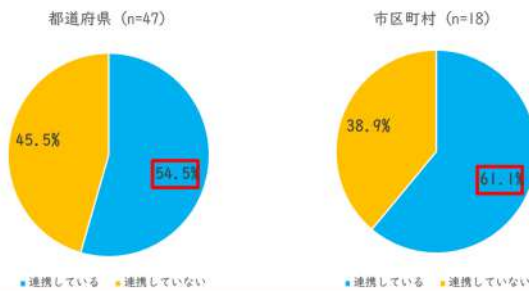
トワークについて「わからない」という回答が約4割を占めている点です。自治体で把握する必要すら認識されていない可能性もあり、社会教育人材のネットワーク化を考えるうえでの大きな課題として認識しているところです。

4 質問紙調査の結果について

(4) 社会教育人材のネットワークの状況（調査票1、2）

【自発的な社会教育人材ネットワークと行政の連携状況】

自発的なネットワークと行政との連携状況について、都道府県の54.5%、市区町村の61.1%が連携している。



次に、これら自発的なネットワークと、行政とが連携しているかどうかを尋ねた結果がこちらの円グラフです。都道府県については5割を超える自治体で、市区町村でも約6割を超える自治体で「連携している」という回答がありました。行政で進めるネットワークだけでなく、自発的なネットワークについても期待が集まっていることが伝わってきます。

4 質問紙調査の結果について

(5) 社会教育主事と社会教育士の連携状況（調査票5）

【社会教育主事と連携した取組の有無】

社会教育主事と連携した取組を行っていると回答した社会教育士の割合は約3割



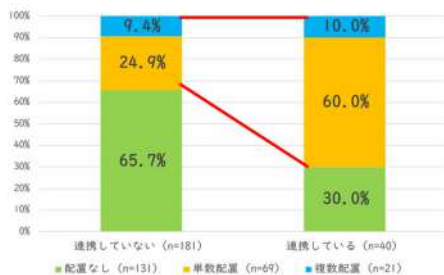
社会教育士の称号を持つ皆さんに、社会教育主事と連携して何らかの取組を行っているかどうかを尋ねた結果がこのグラフです。121名の社会教育士のうちの約3割から、社会教育主事、教育行政等と連携しながら活動を進めているという答えが返ってきています。この3割をどれだけ今後伸ばしていけるかということが、先程見ていただいた社会教育の裾野の広がりや社会教育人材が果たすべき役割を示したポンチ図の理念を実現していくうえで、重要なポイントになっていくのかなと思っています。

4 質問紙調査の結果について

(5) 社会教育主事と社会教育士の連携状況（調査票1、2）

【社会教育主事の配置状況と社会教育人材の連携（町村）】

社会教育主事が配置されている自治体ほど、社会教育人材間の連携が進んでいる。



※社会教育士との連携に関する5つの質問に対し、一つも当てはまる項目がない自治体を「連携していない」とし、「連携している」自治体と比較した。

繰り返しになりますが、社会教育主事が様々な社会教育士を含む地域人材を結びつけながら、多様な活動を展開していくことが期待されているわけですが、そうした取組が推進しやすい状況について明らかにしようとした分析が、このグラフになります。右側に示した社会教育人材どうしの連携を積極的に進めていると回答していた自治体群と、そうではない左側の自治体群とで、

社会教育主事の配置状況に差異がないかを分析した結果です。

結果を見ると、社会教育人材の連携を積極的に進めている自治体では7割ほどで社会教育主事が配置されているのに対し、連携が進められていない自治体の約65%で社会教育主事が配置されていないことが明らかになりました。社会教育主事の配置が、社会教育士が活躍できる土壌づくりに重要な役割を果たしていることがうかがえる結果が確認できたといえるでしょう。

なお、今回は時間の関係上触れられませんでした。この社会教育人材と連携しているのかということ以外にも、地域学校協働活動を推進しているかどうか、住民の学習ニーズの把握ができているか、といった面においても社会教育主事を配置している自治体の方が、積極的に取り組んでいることが、実は明らかになっています。

5 まとめ

【質問紙調査から見えてきたこと】

- 社会教育士の活躍促進において、社会教育士から、**社会教育人材ネットワークの充実**が求められている。
- 社会教育人材ネットワークの構築が進んできている**。特に、都道府県レベルでのネットワークが構築されてきている。
- 社会教育主事が配置**されている自治体では、**社会教育人材間の連携がより進んでいる**。
- 社会教育士の活動状況は十分に把握されていない状況**。また、**社会教育主事と社会教育士との連携も十分ではない**。
- ネットワークについては、その**運営の在り方が課題**となっている。



社会教育主事・社会教育士の実態について十分に把握していくために、この先も本センターでは、データの分析やヒアリング調査を重ねていくつもりであります。最後になりまして恐縮ではございますが、今回調査にご協力をいただいた皆さんに改めまして感謝を申し上げますとともに、今後皆さんの生の声をもっと聞かせていただけるような調査を実施していきたいと考えておりますので、引き続きご協力をいただきますようお願いを申し上げます。私の中間報告を終えさせていただきます。

5 まとめ

【調査研究の方向性】

- 実態把握** 質問紙調査により、好事例の収集や分析につながる現状を把握する。
- 調査の集計** 集計結果を中間報告にまとめ、ヒアリング調査先を選考する。
- 好事例の把握** ヒアリング調査により、社会教育主事・社会教育士の活躍場면을把握する。
ヒアリング先（案）
 - ・人づくりが地域づくりに結びついている自治体
 - ・社会教育主事と社会教育士が連携・協働している自治体
 - ・社会教育主事としての知見が継承されている自治体
 - ・首長部局において社会教育士が活躍している自治体
- 現状と課題の分析** ヒアリング調査の結果から、社会教育主事・社会教育士の現状を分析し、課題を明らかにするとともに、今後求められる活躍場面とその必要性について整理する。
- 報告書の作成・発信** 調査結果及び分析結果を報告書にまとめ、適切な社会教育主事の配置、社会教育士の活躍に向けて、全国の自治体での活用を促す。



ご清聴いただきましてありがとうございました。
ございました。

ご静聴ありがとうございました。



「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか」

コーディネーター

青山 鉄兵（文教大学 准教授）

登壇者

藤野 真一郎（恵庭市教育委員会教育総務課長）

豊田 庄吾（三次市教育委員会教育部次長（初代隠岐國学習センター長））

鈴木 貫司（NPO 法人わかもののみち／みんなの公民館まるセンター長）

青山：皆さんこんにちは。オンラインの皆さんもこんにちは。今日進行を務めます青山といえます。よろしくお願いいたします。普段は文教大学で社会教育主事の養成をやりながら、いろいろな実践や政策などに関わらせていただくことが多いのですが、今日はこういう立派な舞台に立たせていただいて、少しの緊張感と少しの楽しさの両方あるような感じしております。よろしくお願いいたします。

今日、申込みだけで 700 人を超えているそうです。皆さんとある程度インタラクティブに進められたらいいなと思っていろいろ画策をしてみました。皆さんがワットとスクリーンに文字を書ければいいなと思ったのですが、なかなかそうもいかないで、オンラインフォームを用意してあります。お手元の資料の 3 ページに QR コードがあるので、コードを読み取っていただくと、フォームの申込みができるようになっております。ここで皆さんからのコメントやご意見を受け付けます。リアルタイムでいろいろなことを共有できるわけではないのですが、何かあればぜひ書いていただきたいと思います。我々の手元でも見ることができますので、試しに皆さんの意気込みでも書いてみますか。どうですか。書ける方いますか。ちょっとやってみましょうか。（書き込みが画面に映し出されるのを見て）画面がこういう感じで出ます。画面は適宜、必要に応じて切り替えていきたいと思っています。質問でなくとも、応援コメントとか、簡単なリアクションを書いても大丈夫ですよ。

ただ、このように見えてしまいますので、あまり変なことは書き過ぎないように。最終的には前向きな会にしていただければと思います。もちろん、今の現場の問題点であるとか、批判的なことも書いていただく分には構いません。個人情報などの最低限のところだけ守っていただければ、自由に書いていただいてもいいと思います。（コメントを見て）パンダかわいって書いてありますね。日本社会教育士会ですとか、青山先生というものもありますね。わくわくしておりますとか。ありがとうございます。このような感じでよろしくお願いいたしますと思います。

というわけで、最初に私が少しだけ導入をした上で、三人の発表を聞いて、後半は皆さんと一緒に考える時間にしたいなと思っているのですが、今日のテーマについて思うことを少し

だけお話しさせてください。それは何かというと、「社会教育」という言葉。今日このキーワードで集まってくださった方が多いと思うのですが、今、世の中に「社会教育」という言葉が二つあるのではないかと思います。

一つ目の「社会教育」は、いわゆる制度としての社会教育。つまり教育委員会の中の学校教育外のことで、制度的には社会教育の守備範囲はここになるわけです。教育行政の中の学校教育じゃない方の、でも文化財が入るか入らないかなどいろいろありますが、役所で言えばこの守備範囲のことを社会教育と呼ぶということが社会教育法でも規定されていますし、現状の社会教育の様々な資源や制度はここに紐づいてきた。これを制度としての社会教育と呼んでおきましょう。

もう一つは、今日のテーマに近いですけれども、地域の基盤としての、あるいは地域づくりの土台としての「社会教育」という考え方がある。地域の土台としての社会教育という考え方は、古くは公民館の寺中構想など、これは昔から社会教育の源流ですし、それこそ社会教育のスピリットでしょと言いつつも、肉体は先程の制度としての社会教育の中にあるような状態がずっと続いてきた。ただ、社会教育を巡る状況が変わる中で、改めて、この地域の基盤としての社会教育が重視されるようになってきた。昔からそうだけれども改めてこの部分が強調されるようになってきている部分がありますよね。

例えば、社会教育士の動きもその一部に繋がってくると思うのですが、そこでは制度的に社会教育かどうかということよりも、町全体が、あるいは地域社会全体が、社会教育的かが問われるような状況と言えるかもしれません。これは諸刃の剣の面もあるのです。社会教育の理想を追求することは、一方で、この制度としての社会教育の必要性とか枠組みを見えにくくさせてしまう危険性もあります。社会教育士が盛り上がることによって、制度としての社会教育はいらなくなったら困るのです。しかし、理想を追求することと社会教育は不要だという人たちが、何か結論だけ一緒になっちゃうというような、そんな場面もないわけではありません。

我々は、この二つの社会教育、つまり制度としての社会教育を見据えつつ、これからの社会は行政制度として社会教育かどうか以上に、この地域の中で、自治を耕すとか地域を耕すとかいろいろな言い方がありますが、地域づくりの基盤としての社会教育の在り方、この二つの両睨みでやっていく必要があるのではないか。そのときにポイントになるのは、先程社会教育「的」ということが大事になると言いましたね。社会教育主事じゃなくても、社会教育に携わる人はたくさんいる。制度としての守備範囲じゃなくとも社会教育的な人はいっぱいいる。では、この社会教育的の中身って何なのということが多分問われているのだろうというふうに思っていて、この社会教育的の中身みたいなものを一緒に考えられたらいいなと思っています。

特に、これからの様々な状況の中で、各地で人が体現することもあるでしょうし、実践が体現することもあるでしょうけれども、様々な形でこの社会教育的にこだわる。そんな1時間半にできればいいなと思っています。

では、まず、10分ずつ登壇者のお三方にお話をいただいた上で、後半の話を進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひします。早速ですが、藤野さん、準備はよろしいですか。前振りが長くなりまして、大変失礼いたしました。気楽にやっていただければと思います。お願ひします。

令和7年度 国立教育政策研究所教育研究公開シンポジウム

『これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～』
 恵庭市教育委員会 藤野 真一郎

■ 自己紹介 ～ 社会教育との出会い ～

□ 学生時代：先輩に聞いたら口をそろえて「社会教育って、何でもありだから」という返し…
 □ 恵庭市役所へ：「自治体職員として、地域づくりをやりたい！」＝それって、社会教育だね

■ 社会教育主事になってみて～平成14年度～平成26年度

□ 花と緑の課（おっ、社会教育できるじゃん） → 環境課（やっぱ社会教育できるじゃん）
 → 社会教育課（外から見ているのと、実態を聞いてみるとは、全然違うものだ）
 ・（それまでの部署と比べて）社会教育主事としての裁量（自由度）の広さ
 ・ 社会教育主事として発令を受けた今日からの自分と、昨日までの事務職の自分の違いはどこ！？（→社会教育主事の専門性って、なに！？いつも、もやもや）
 ・ 税金を使っている社会教育（行政）って！？（絶えず頭から離れない）…そんな13年間

■ 防災担当者として（社会教育的なアプローチをしている自分）平成30年度～令和2年度

※平成30年9月6日/午前3時6分：北海道で初めて震度7を記録した胆振東部地震、
 → 全道が停電したブラックアウト、恵庭市（震度5強）でも7か所の避難所を開設
 【胆振東部での教訓を踏まえて】
 □ 自助・共助・公助の構図は分かり易い
 ● 公助（税金を投入して）：災害用備蓄資機材を揃える、職員の災害対応能力を高める等
 （行政の自己完結的な取組として、そんなに悩まないで済む）
 ● 自助、共助の主体は、一人ひとりの市民であり、地域！！
 → 主体的な力の形成（意識の変容）を図るためには、まさに社会教育的論理（アプローチ）が必要
 → 社会教育的な備み方（どうしたら意識の変容が図れるか！？）
 → 学びあう（お互いに影響を及ぼしあう・高めあう）関係づくりを持ち込む。

□ 例：防災学習会の取組

- 表の学習テーマ：「避難所とは何か！？」～地域主体の避難所運営～
 （裏の本質テーマ）「この地域にとって、共助とは何だろうか！？」
- 学習ツール（手段）：避難所の運営マニュアル作り（を造って、裏テーマに迫る）
 → 「関係づくり」は、真体の取組（ときに行政の事業がきっかけに）
 想いを共有した組織的な活動によって作られていく。
 ⇒ 社会教育実践…それは行政の事業の域を超えた地域主体の取組
 （そのように持っていく…それが難しい・専門性）



※ 地域は縦割りでの仕事を考えているわけではない。様々な課題が必ずしもそれぞれ別個に存在しているのではなく、地域においては重層的に絡み合っている、と実感。

藤野：ありがとうございます。（会場からの拍手を受けて）とても話しやすくなりました。改めて、皆さんこんにちは。北海道の恵庭市という町から来ました藤野と申します。今の導入の青山先生のお話、このままずっと聞いていたいなと思いながら聞いていたのですが、後半のディスカッションが楽しみになりました。

僕の方からは話題提供の一発目ということで持ち時間を守っていきたいと思うのですが、主に防災を担当していたときの話をしたいと思います。防災の事業を詳しく紹介するというよりは、恵庭市の職員として防災を担当した際に、社会教育に引き付けて考えたときに、僕はどんなことを感じたのかということを紹介したいと思います。具体的な話というより抽象的な話になるかもしれませんが、ご了承ください。

今、私は、恵庭市役所の教育委員会で、学校教育の担当をしています。いただいた時間内だとあっという間に過ぎてしまうと思ひまして、足りない部分をカバーできればと事前に5ページほどの補足資料も用意させていただきました。

実際に私が話す内容は2ページもののレジюмеにまとめましたので、このレジюмеに沿ってお話ししたいと思います。最初に私の社会教育との出会いとありますが、いきなりですがここは飛ばします。次に、恵庭市役所に奉職してからということですが、ここもほぼ飛ばします。役所に入ってから3か所目への異動で、社会教育課に配属ということになりました。実は僕は社会教育課への異動は不本意ながらで、係長に言わせれば「藤野くん、だいぶふてくされて社会教育に来たね」と言われました。というのも、僕は学生時代に教育学部で社会教育を専攻はしていたのですけれども、社会教育主事の資格取得に必要な単位をあえて満たさずに大学を卒業して、指導教官にも怒られました。それはなぜかということ、先程制度という話がありましたが、

社会教育行政で社会教育をやりたいとは感じずに、むしろ自治体職員として社会教育の考え、感覚で、先程の社会教育的なという方がいいのかもしれませんが、地域づくりをやりたいと思って、社会教育主事にも正直魅力を感じていませんでした。後に、異動した社会教育課で実際社会教育主事になってみて、叶うことなら退職まで社会教育にいたいなど、社会教育をやりたいなどと思うようにはなるのですが、その社会教育主事の魅力ややりがいは実際にやってみないとわからなかったなと思います。

話を戻しまして、社会教育主事の仲間内の議論でも、「社会教育の考え方って、他の部署でも必要だよな」という議論は昔からよくしていました。今思うと、他の部署でも社会教育が必要だよなという会話は、後の社会教育士の発想と相通じるものかなと思ったりもしますが、とにかく、3か所目への異動で社会教育課に来て、改めて社会教育主事講習を受講して、平成15年、30歳のときに社会教育主事の発令を受けました。社会教育課には13年間いましたが、どんなことをしていたかというのは今日触れる時間がありませんので一切触れません。そのとき、自分が社会教育主事をしていたときに、発令を受けたときに感じたことをお話ししたいと思います。

一つは、絶えず頭にちらついていたことが、社会教育主事の専門性って何だろうということ。今日のここでの話はそういう路線にはいかないかもしれませんが、発令を受けていなかった昨日までの事務職の自分と今日から発令を受けた自分は何が違うのだろうみたいなどころをずっとモヤモヤしていました。

もう一つは、今回のシンポジウムのテーマにも個人的には関係するのかなと思いますが、社会教育主事で仕事をして地域と向き合う中で、中長期的なスパンで地域を捉えないと駄目なのだろうなど、仕事をやればやるほど感じました。そんなふうを考えるきっかけとなったエピソード、例えばコミュニティスクールの立ち上げなどについて、事例を補足資料で触れていますので、よろしければご一読いただければと思います。仕事に携わる中で藤野はそういうことを感じたりしたんだろうなというのを一応書いたつもりです。

今回のテーマ、「今、なぜ社会教育なのか」というサブタイトルがあります。例えば、地域課題を解決するとか、そんなことはもちろん社会教育主事一人でできるわけもなく、できないのですけれども、地域課題に向き合うのは地域住民で、地域住民主体の取り組みにどう持っていくかということが大事なのはわかっている。そのことを考えたときに、そのプロセスをどう地域の人と作っていくかということに心を砕くのが社会教育主事の専門性なのかなと思ったり、それこそ社会教育の出番かなと思ったりしました。僕の中で、経験上もし結論めいたものがあるとしたならば、地域住民の意識を変えるのは誰かということ、それは地域住民自身であって、地域の中でお互いに影響を及ぼし合う関係を作ることによって可能なのだろうなと思っています。そういうことが見えてくるとコツをつかめるようになってきて、そういう関係性をいかにして作っていくかが仕事になっていきました。人の意識というのは簡単には変わらない。どこかの

大学の先生が来て、ありがたいお話を聞いて、帰るときには意識が変わったみたいなのがあれば、先生にはいくらでも謝礼を払うのですけれどもそうはいかない。青山先生は違うかもしれません。

青山：僕も無力なのです。

藤野：すいません。茶々を入れてしまって。結局、地域の方の意識が変わるというのは、例えば、隣の人の何気ない言葉だとか、一緒に何かを成し遂げたり、乗り越えたりというちょっとした成功体験とか、喜びを地域の誰かと一緒に感じ、共有していく関係や場、そういうものがあるって人は変わっていくということ、社会教育主事をしていてすごく感じました。社会教育主事時代にそんなふうを考えるいくつもの経験があって、社会教育行政を離れがたかったのですが、離れることになり、ここから防災を担当していたときの話をさせていただきます。

社会教育主事は何を学習課題とするかということ、それこそ自由で、その自由さも楽しかったのですが、防災課となるとアプローチするのはもちろん防災という地域課題というか学習課題一択になります。その防災という課題に対して地域の方に主体的に取り組んでもらうためには、というようなことを考えてアプローチするとき、これはもう間違いなく僕にしたらもう社会教育主事時代のアプローチというか、手法を持ち込んで地域に入っていくことになります。平成30年は僕が防災担当に異動した年です。この年に胆振東部大地震という大きな災害に見舞われました。ついこの間も青森沖が震源の地震があり、恵庭でも震度4の揺れで、学校教育の担当ということで夜でしたが真っ先に役所に駆けつけて学校施設の安全確認などに夜中回りました。その向かう途中で胆振東部の地震を思い出しました。当時はブラックアウトになり、役所に向かう途中、自転車で向かったのですが、パパッと電気が消えて真っ暗になって、これほとんどないことになったみたいな感じで役所に駆けつけたのを思い出しました。

昨日はこちらも地震で揺れたみたいですね。僕も今まだ心は揺れていますけれども。はい、大分調子が出てきました。話を戻しまして、地域の方に話を持ち込むときには、例えば「地域にはいろいろやらなきゃならないことがありますよね。なまら忙しいのはわかっています。わかっているのですが、できれば防災の方にも目を向けてくれませんか」みたいなお願いから入るのですが、この胆振東部があったことで地震に動機付けをしてもらったといたら語弊ありますけれども、一気に防災担当は商売繁盛といいますか、出前講座はじめ、防災一色みたいな感じになりました。もうそれに応えるだけでも大変というような感じになったのですが、その中の一つで「防災学習会」という取り組みを紹介させていただきたいと思います。

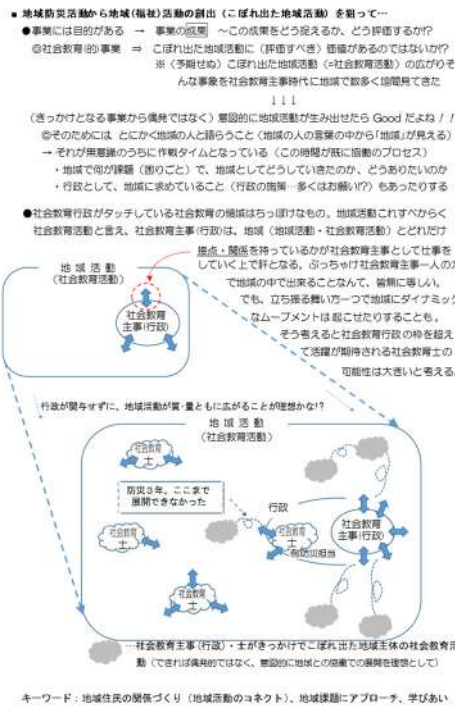
これは、防災学習会を通して地域ごとに避難所運営マニュアルを作るという事業です。胆振東部地震の際は7か所ほど、恵庭市内に避難所を開設しました。これだけ大規模な避難所開設は恵庭では初めてでした。避難所の考え方として、地域主体で運営するという事になっていきます。当然役所の人間も情報連絡員としてぱっと担当が駆けつけるのですが、運営は地域主体ということです。しかし、胆振東部地震では、地域主体の避難所運営がうまくいかなかったという反省がありました。避難所運営マニュアルづくりの防災学習会の要素をざっくり話しますと、

収容避難所に指定される施設、主に学校あるいは公民館なのですが、そこが実際に避難所として開設されたら、地域主体でどう運営するかということ学ぶのが防災学習会です。例えば A 小学校というところで避難所運営マニュアルを作るよとなると、小学校区の町内会や民生委員、福祉施設関係者などに集ってもらって、防災の専門家から話を聞いたり、実際にその A 小学校内をみんなで見て回って、「いざ避難所になったらこの教室はこういう使い方にした方がいいよね」みたいな話し合いをしてもらったりしながら、A 小学校の避難所運営マニュアルを作っていきます。そんな防災学習会ですけれども、ただ地域の協力を得てマニュアルを作るだけだったら、マニュアルづくりをこなすだけになるのですが、せっかくやるのであれば、社会教育をやってきた人間としては、この避難所運営マニュアルづくりを通してどう地域が変わってほしいかを考えてという狙いを持って取り組もうと思い、マニュアルづくりをやってみました。

そのための手法だとかアプローチをどうするかということ考えることは、僕の中ではこれはもう社会教育そのものでしたので、学習課題は選べずに防災だよということはありませんけれども、防災課にいたときは僕の中では社会教育課にいた感覚でした。その一つのパロメーターというか、社会教育をやっているという感覚として、避難所運営マニュアルづくりをきっかけに、別の地域防災活動が動き出すことができました。僕はこれを「こぼれ出た地域活動」と呼んだりするのですが、そういう予期せぬ地域活動、社会教育活動が生まれたときに、そのきっかけとなった事業、社会教育事業や社会教育的な事業には意味があったのかなと思います。マニュアルができておしまいではなく、それをきっかけにいろいろな防災活動が地域の中でうごめいてきたときに、いいきっかけができたな、あの事業は本物だったのかなと感じました。

特に防災は、地域福祉と結びつきやすいと言いますか、地域福祉と結び付けないと駄目だなということを経験から学びました。災害が起きたときにお年寄りや障害をお持ちの方、災害弱者と呼ばれる方をどう守るかということは地域で考えるのですが、そもそも地域は行政と違って縦割りで物事を考えていません。それは社会教育主事時代に一番学んだことです。地域は縦割りで物事を考えてない。防災も、防災のことだけを考えてアプローチしては駄目だということはすごく感じました。地域の中では、災害のときだけでなく、日頃からそういう方々のことを気にかけているわけですね。そういうことも含めて、このマニュアルづくりをきっかけにどういうアプローチができるかを考えながら、防災学習会をやっていました。今回は避難所運営マニュアルづくりの話をしました。そこからいろいろな防災活動、こぼれ出た地域活動が生まれたら、この事業は社会教育的な意味があったのかなみたいな経験をしました。

そういう「こぼれ出た地域活動」について、補足資料の方で触れています。ここで時間となりましたので、一旦お開きとさせていただきます。後程、この辺りの話に触れていければと思います。ご清聴ありがとうございました。



青山: ありがとうございます。いや、面白いですね。防災課に行ってから社会教育の仕事と思って防災課のお仕事をされていたということ。先程の社会教育的かどうかが大それた話もそうですが、文部科学省のサイトに藤野さんが登場されていますよね、掛け算で「社会教育士×〇〇」と表しますが、そういう中でまさに社会教育的な発想で他のお仕事をされている事例だったのかなと思います。

よろしければ皆さん、藤野さんに聞きたいこと、ただ面白かったという話でもいいので、オンラインフォームに書いてみましょうか。いかがですか。1分ぐらい。今書いていただくとメッセージが直に伝わります。また、今すぐにはお答えできない質問が多いと思うのですけれども、後でお答えいただける時間があればしていただこうと思っていますので、藤野さんへのコメントがもしあれば、ぜひ今お書きいただければありがたいなと思っています。よろしくお願いいたします。

(コメントを見て)「確かに部局での業務って社会教育ですね」なんて書いてくださっている方がいます。共感もありそうですね。ありがとうございます。「社会教育主事時代も防災をやっていたのですか」って書いてありますけれども、(藤野氏を見て)そういうわけじゃないのですよね。全くですよ。そうですね。防災課へ行っても社会教育っぽかったというあたりが面白いですね。「こぼれ出た地域活動」という表現が面白いというコメントもいただいています。ありがとうございます。

それではお二人目に移っていきたく思います。続きまして豊田さん、準備は大丈夫ですか。

はい。では、拍手をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。



豊田：改めまして、豊田と申します。よろしくお願いいたします。自己紹介は資料に書いてある通りなのですが、今、広島県の三次市というところの教育委員会で働いています。ぜひ名前だけでも覚えて帰ってください。僕の名前ではなく、三次という名前を覚えて帰ってください。



今日は、島根県の隠岐にある海士町で15年ぐらいろいろな活動をしていたのですが、そのときの話を中心にさせていただきたいなと思っております。自分と社会教育との繋がりなのですが、会場にいらっしゃる方々のように社会教育を一生懸命やってこられた方とはちょっと違うと言いますか、うっかり系ですね。うっかりこの界限に迷い込んでしまったと。ですので、あまり専門的ではないですし、島根県の社会教育委員

などもやらせていただいたのですが、専門外で好き勝手喋っていたみたいなどころがあります。いろいろな話をしますが、少しでも皆さんの参考になるような話ができたらなと思っておりますのでよろしくお願いいたします。



自分と社会教育とのつながり

三次市 概要

広島県の三次市は人口47,286人
(令和7年12月1日現在)
面積が778.2km²

広島県北部、中国地方のほぼ中央に位置する自治体。複数の川が合流し、山陰・山陽を結ぶ交通の要地として古くから発達し、工業・商業が盛んな町である。公立の学校数は小学校が20校、中学校が12校、県立高校が3校ある。三次市では、「行動する社会教育委員」を中心に、地域と学校・行政が協働して学びとつながりを育む取組を進め、持続可能な地域コミュニティの基盤づくりに挑戦している。

いろいろなキャリアを歩んできたのですが、元々民間から始まって、15年前に隠岐に移って、公立塾みたいところで地域と一緒に子供たち向けの学びを作るみたいなのをやっていました。自分自身も2,300人ぐらいの小さな島のコミュニティの一員として、学術的とか

つながる学び舎



高校2年生：考える力
5つのゼミに分かれて実践！「グローバルゼミ」

このスライドは当時の「夢ゼミ」の様子で、いろいろなプログラムを総称してそう呼んでいたのですが、例えば、「米を買ったからとりあえず売れ」と言って「これは大変だぞ」というのを感じる。子供たちは「そんな味がわかんなくゃ売れないっすよ」と言うので「来週食べるぞ」と体験してみる。すると、「どんな思いで農家さんが作ったかわかんないと売れません」と言うので「次、農家さん呼ぶぞ」と言って話を聞くという感じで、いわゆる

大学でいうゼミ形式の授業をやっていました。

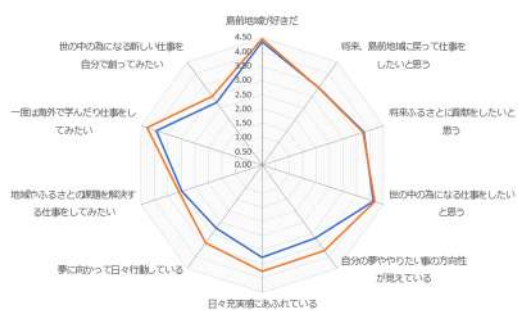
地域のまなび舎



『ブータン勉強会』

グラフタイトル

—H27入学期— —H29 3年卒—



ICTの活用



『遠隔夢ゼミ』 物理的な距離を超えてつながる

地域とつながり学ぶことで起きた変化



生徒のソーシャルキャピタル(人とのつながり)の蓄積

人生において重要な3つの資本

経済資本

- 財産（お金、土地、資源など）

文化資本

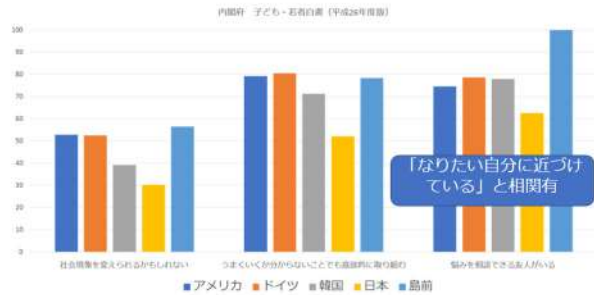
- 学歴、芸術性、振る舞い、言葉遣い

社会関係資本

- 人間関係、信頼、助け合い

全て学力と相関

若者意識調査の国際比較



高校生向けの学びの場を作るのですけれども、地域の方々にも参加していただきながら、いろいろなテーマで勉強会をやったり、遠隔で他県の高校と繋げながら学びをつくったりなど、いろいろなことをやっていました。地域と繋がったことで子供たちに起きた変化は、いわゆる社会関係資本が醸成されたこと。この左のグラフですが、いわゆる自分と社会が繋がっていると思うかどうかというところを見ると、いろいろな海外の国と比べても島の高校生は「自分が社会現象を変えられるかもしれない」というところを選んだ割合が多かったり、グラフの一番右が「悩みを相談できる友人がいる」、これは友達だけじゃなくていろいろな大人も含めてですけれども、100%「いる」というところを選んだり、アンケートを取ると繋がりがあることややりたいことがはっきりしているとか、それに向けて日々行動している、充実感にあふれているといった感想も聞かれました。



それによって地域もどんどん変化していく。高校生がいろいろなチャレンジをする、いろいろな課題を解決することで、今度は地域側にも刺激が伝播して、地域の人たちも当事者として今まで諦めていたいろいろな課題に対して何とか頑張っていくぞという気持ちが増えていくみたいなこともありました。ここまでのところでいくつかキーワードをまとめますと、一つは繋がりを学びに生かしていくという話、もう一つは、ちょっと大きい話ですけれども、

子供たちも繋がることで自己効力感が上がったり、自分が地域を作っていく一員なんだとか社会を作っていく一員なんだと感ぜられるようになったりといった、社会と自分が繋がっている話。目の前のおじいちゃん、おばあちゃんと繋がることで、自分が頑張ったことをおじいちゃん、おばあちゃんが「ありがとう」って言ってくれる。これの総和が社会と自分が繋がっている感じになったのかなと思っています。



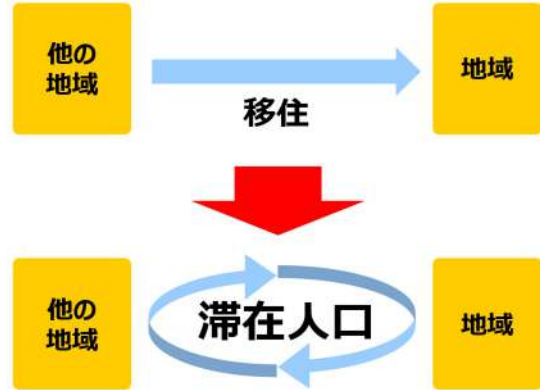
【事例②】大人の島留学（還流起こしPJT）

「還流おこしプロジェクト」

令和3年度はこのスローガンを実現するためのチャレンジ総決算の年として、海士町らしい「承前啓後（昔からのものを受け継いで、未来を切り開くことの意味）」を貫きながら、**意志ある若者の島への還流を起こすことを目指す「還流おこしプロジェクト」を立ち上げ**、「だってもあんきにおもつしえ島に」を合い言葉に、これまでの取り組みを一層強化する人事、組織編成としました。
（令和3年度辞令交付式町長挨拶より）

海士町
還流起こしプロジェクト
#離島にもっと若者の還流を

大人の島留学
～1年間の就労型お試し移住制度～



二つ目の事例です。「大人の島留学」ということで、教育からは少し領域をずらしてたくさん若者を島に呼ぶみたいなプロジェクトに関わりました。簡単に言うと「2,300人の島に年間100人の若者を呼ぶぞ」という挑戦的なプロジェクトを、役場若手職員がやるというので、僕らの中で「いろいろ問題も出てくるだろうな」って思いながら、でも否定ばかりしたら老害だと言われるので顔はニコニコしながら「やったらいいじゃん」みたいな感じでやりました。1年間のお試し移住制度ということで、他の地域から島に移住者を増やすのは大変なので、100人が1年限定で来てくれる。100人は1年で帰る。翌年違う100人が来る。また帰る。これをぐるぐるやっていけば100人増じゃんみたいな、まさに試行錯誤的な取り組みですけれども、そのようにいろいろな若者を受け入れることで地域側がどう変わっていくのかを見る壮大な社会実験をやったということですね。



★アンラーンについて

社会の急激な変化に対する、
アンラーン（脱学習、手放すこと）
の必要性

※学習したことが通用しなくなってくる

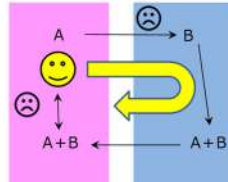
★越境学習がアンラーンを生む？ 越境的な学びについて



企業における越境的な学びについて

(参考) 石山恒貴先生 (法政大学政策創造研究科) の話
越境：慣れ親しんだ「ホーム」とそこから離れた「アウェイ」を行き来すること

越境することで、「自分の当たり前」が通用しなくなると、内省をしアイデンティティの見直しが起こる
→これまでのアイデンティティを否定することではなく、あくまでも見直すこと
アイデンティティが多元化していくということ
→最初はアウェイに行くとき違和感を抱くが、次にホームに戻った時に違和感を抱く
→自分の中の多元化したアイデンティティの摩擦が起きている



アイデンティティの多元化 = 自分の中のAという正解へ固執することを手放すこと
越境によって、学びを得づらいパターンについて

大人の島留学による地域側の変化

関係性による取組み ⇔ 問われること、ゆるむことで、
目的（本質）を意識した取組みに

外部人材との関わりは、「逆」越境的な学習の機会を創り出し、地域住民のアンラーンを引き起こすきっかけをつくっているのではないかと？

改めて大事なと思うところは、どんどん新しく社会が変わるとともにどんどん新しい知識を学んでいくというよりは、昭和の頃の物差しみたいなものを手放していく、アンラーンしていくことが大事なと思います。また、越境という、ホームを離れてアウェイに飛び込むみたいな文脈で言うと、いつもホームにいた頃は気付かなかったことが、アウェイに行くと自分の輪郭だとか地域の良さみたいなものに気付くように、越境するといろいろな学びがあるですけれども、逆に越境者を受け入れる、いろいろな人たちが地域にいっぱい来てくれると、あたかも自分が外に越境しに行ったような逆越境的な環境も作れるというようなこともありました。



なぜ若者は
地方から都会に出ていくのか？
その要因 (X)は何か？



3～4年前にあった大規模な調査ですけれども、なぜ若者は地方を離れて都会に出ていくのかという調査で、それは都会の方が給料がいいとかではなく、寛容性。田舎は寛容性が低いところがあったと。地域がほぐれていくために、地域側に寛容性が必要ではないかなと思ったときに、自分たちだけでは難しく、いろいろな人たちがごちゃ混ぜになる中で、寛容性が大事だなんて気付いていくことが大事ではないかなと思いました。一番下に「イネーブラー」と

いう言葉を書きました。日比野先生がおっしゃったところとも繋がりますが、「イネーブラー」は日本語で言うと「いいじゃんいいじゃんおじさん」なのですけれども、若い子が来たときに「この地域の流儀はやな…」ではなく、「いいじゃん」って一言目に言った上で、一緒に作っていくスタンスがあるという、そういう存在が大事ではないかなと思ったということです。

- ① 社会教育とは
“地域につながり直す力”を育てる営み
- ② 社会教育の本質は
「自己更新 × 関係更新 × 地域更新」の循環
- ③ 時代の変化に対応する社会教育のアップデートとは
“学びのインフラ化”

本当に社会教育はインフラだなんて思っていて、自分たちだけだと地域がアップデートしていかないの、そういったところにいろいろな人たちを混ぜる役割が社会教育士だったり社会教育主事だったり、社会教育的なことを仕掛けていく人だったりするのではないかなと思っています。以上です。ありがとうございました。

青山：ありがとうございました。皆さんぜひオンラインフォームに書いていただければと思います。一つ質問が書かれていますが、「最初から戦略的に地域づくりをやるつもりだったのですか？それとも結果として地域づくりが後からついてきたのですか？」と。

豊田：後からです。なんか行き当たりばったりみたいな感じで、計画的にやるというよりは、とにかく試行をしていく。今日喋っていることは全部後から意味付けしたみたいな感じかもしれないです。

青山：なるほど。ありがとうございます。最初にうっかり入ってきたと言っていましたけれども、社会教育の世界はうっかりに満ちていますよね。生涯学習だってうっかり学んじゃうわけだし、うっかりボランティアもしちゃったりするわけですよね。目的・合理的にいろいろなことを回していくということと、このうっかりの余地がどれだけあるかということが、両方必要なのだろうなというのもキーワードで感じておりました。ありがとうございます。

コメントには「話を飛ばしたところを聞きたかった」というものもあるのですけれども、資料は見られるようになっていきますので。(コメントを見ながら)「一番素敵な一コマが飛ばされた」というコメントもありましたが、多分、鮭の川の話なのではないかと。後でお話しいただければと思っています。よろしくお願ひします。

それではお三方目に移っていきたいと思います。鈴木さん、準備は大丈夫ですか。拍手をお願いします。

国立教育政策研究所教育研究公開シンポジウム 発表③

子ども・若者がまちの主役に みんなの公民館まるの 取組について



みんなの公民館まる 館長
ファシリテーター

鈴木貫司(すずき・かんじ)

一般社団法人トリナスNPO法人わかものまち

静岡県浜松市出身
教育学部を卒業後、青年海外協力隊としてエクアドルにてユースの活動支援に携わる。帰国後小学校教員、菊川市市民協働センターを経て、現職。

2018～ JICA海外協力隊
2020～ 小学校教員(静岡県浜松市)
2022～ 菊川市市民協働センター(わかものまちづくりに従事)
2023～ みんなの公民館まる

鈴木：鈴木貫司と申します。よろしくお願いします。本日は「子ども・若者がまちの主役になるみんなの公民館まるの取組について」ということでお話しさせていただきます。自分は元々JICAだったり、学校教員だったりをしていて、社会教育ど真ん中というわけではなく活動してきたので、そういう外の、民間の視点から今日はお話できればなと思っております。

静岡県焼津市



焼津駅前通り商店街



みんなの公民館まるがあるところですがけれども、静岡県焼津市というところで、マグロやカツオが有名な漁師町になります。その中に焼津駅前通り商店街という商店街があるのですがけれども、その一角を借りてみんなの公民館まるを昨年の9月にオープンさせました。この写真にある通り、実は平日はほとんど人が歩いていません。本当に閑散とした、いわゆるシャッター商店街みたいなところだったのですがけれども、最近は商店街のま

ちづくりみたいなことをまるだったり、別のプログラムだったりやっていく中でシャッターが開くなど、いろいろなまちづくりのプレイヤーが集まっているというところもあります。本日はその話は時間が無いのでできないのですがけれども、商店街のまちづくりにも関わっております。

中高生世代の放課後交流拠点

若者らっとホームやいばる



自分は大学生のときに、焼津市からの委託で、学生NPOとして若者の交流拠点を運営していました。代表となっている友人と一緒に、大学で学生NPOを立ち上げたのですがけれども、僕は立ち上げた後にJICAの派遣で海外へ行きます。その間に、コロナウィルス感染症拡大の影響で、市の方針から若者プラットフォーム「やいばる」という拠点が閉鎖してしまいました。このようなことがあって、今度は民間で、行政の方針ではなく、自分たちで作れないかと

ということで、「まる」のコンセプトが始まりました。



もう一点ですが、「みんなの図書館さんかく」という図書館があります。この図書館、全国で「みんとしよ」という名前で110館ぐらいに広がっています。1箱本棚オーナーとあって、地域の方が本棚を借りて、月々1,000～2,000円、スライドの「さんかく」は2,000円ですけれども、決められた金額を払っていただいて、そのお金で家賃や光熱費を払って、そしてオーナーさんになるとお店番ができる権利が与えられるというシステムです。お金を払ったからといって何かもらえるというわけではなく、コミュニティに参画できる。そこから「さんかく」という名前で約5年前にオープンして、今も続いています。今、日本全国で、こども・若者の居場所が立ち上がっても、補助金がなくなって潰れていくなどが問題となっていて、どういうふうに持続可能にしていくのかがすごく大きな課題になっているのですけれども、僕ら民間でこども・若者の居場所を作れないか、また、「さんかく」の取り組みが全国にすぐ広がったことから、民間で立ち上げた居場所をモデル展開して全国に広げていきたいと考え、みんなの公民館まるを昨年9月に立ち上げました。



みんなの公民館まる



民設民営・公民館

2024年9月オープン

小学生～大学生の1年の累計利用者数
約3000人

大人の1年の累計利用者数
約700人



1F
ラウンジ



2F 自習室・活動室



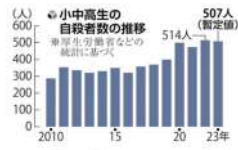
2F 和室 交流室



2F コワーキング

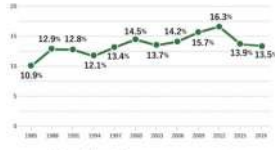
「さんかく・まる」の「まる」です。「しかく」もできるのかなと頑張っています。みんなの公民館まるは中学生・高校生が中心で、小学生から使えるのですが、民設民営でやっております。1階がラウンジになっていて、2階が自習室と和室です。コワーキングも併設しているので、会社が登記してコワーキング施設として利用しています。コワーキングは自分たちでDIYをして、中高生と一緒に壁を壊したりしながらみんなで作った施設になります。

いま、子ども・若者を取り巻く社会は「最悪」と言っても過言ではない。



子どもの自殺 507人(2023年)
15歳から29歳までの死因の1位は自殺

出典: 読売新聞



子どもの貧困率は13.5%(2019年)
7人にひとりが貧困状態にある

出典: 日本財団

今後10年先を見据えた地域の未来

- 元気な若者はどんどん首都圏、海外に出ていく。
- 一方、地方は不登校が増え、引きこもりが増える。
- 地域の労働力は弱くなり、地方企業も弱くなる。地域の経済が弱くなる。

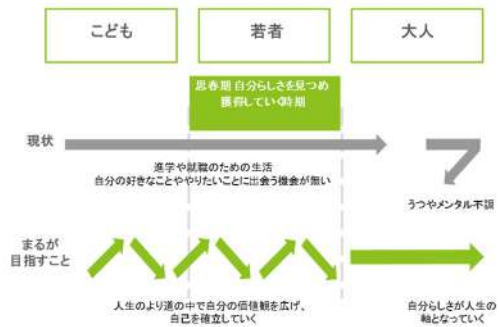
▶だからこそ、

いま中高生世代に対する **圧倒的な投資** が必要

子ども・若者を取り巻く環境はどんどん悪化しているのではないかと思います。子ども・若者が減っているのにどうしてなんだと思いますし、今後10年を見据えた地域の未来を考えると、中学生高校生世代の子ども政策もすごく多いのですけれども、やはりユース世代に対しては圧倒的に投資が必要なのではないか、それを何か地域の力できないかというところが僕らの一番の思いです。ですので、今、企業や個人の寄付で民設民営の公民館を成り立たせようということを目指しています。

10代20代の
人生のより道になる場所

自分らしさに出会い、社会へ表現できる拠点



民設民営の持続可能な子どもの居場所を地域でつくる

10代20代が
人生の道草を食べる公民館



スポンサー企業 34社

(横浜・藤枝・島田・静岡を拠点とした企業)

個人寄付 98名

コンセプトは「10代20代の人生のより道になる場所」です。何か目的意識を持ってとか、教育目標を立ててということではなく、自分のやりたいことに没頭する中で、後付けで自分にとってすごく意味のあるものだったなって思うことがあると思うのですけれども、そういった人生のより道みたいところ、余白が大事なのではないかとこのころで、コンセプトにし

ています。「若者世代、大事です」というところです。人生の道草を食べる公民館ということで、ロゴを見ていただけるとわかるのですが、草をくわえていますよね。道草を食べています。企業のスポンサーが34社、個人の寄付が98名ということで、いろいろな企業にスポンサーに入っていていただき、公民館には珍しくこのようにスポンサー名がめちゃくちゃ並んでいます。

公共が取り組んでいたものを
地域力でつづけていく

小中高大学生がつくるオープニング記念イベント



開館までのプロセスを子ども若者 当事者と一緒につくる



飲み会以外にもどんどん自分たちの企画を出し始める



「飲み会がしたい！」という言葉を全力で応援する



→自己効力感を高め、新たな自治活動へ

公民館のような社会教育施設は公共が取り組んでいたものですが、それを地域力で作っていく。行政がやらなくてもいいというわけではないのですが、ただ、今後税収が減っていく中で、地域のところを全部行政に任せていいということではないと思います。若者自身、僕ら自身がいろいろな人を巻き込みながら、行政にもお金ではないところで関わってもらい、少しずつ連携しながらやっていこうと活動しています。お金を持っているのは企業なので、予算はそこからちょっといただいて。また、お金を出してもらっただけじゃなく、企業の人も思いを持ってい

る方がいっぱいいらっしゃるのです、そういう方たちがどのような関わり方をしていきたいかも大切にしています。昨日、実は忘年会がありまして、活動報告会を行いました。40名ぐらいが「まる」に集まって、地元企業の社長さんだったり、うちのボランティアインターンだったり、地域の人だったりなどごちゃまぜで。「なかなかこんな場所ないよ」と皆さんがおっしゃってくれましたけれども、そういった場がどんどん広がっていくといいなと思います。「まる」は始めてまだ1年ちょっとなのですけれども、企業にとってもすごくいい社会教育、学びの場になっているということをお願いいただきました。

この写真はオープニング、昨年9月のイベントです。実は、この公民館を作る前のプロセスから、中学生・高校生とロゴのデザイン、内装を一緒に考えて、ワークショップをしながら作ってきました。この写真は椅子をみんなで組み立てている様子で、右下の写真は中高生実行委員会です。「どんな場所にしたいか」というところを一緒に考えながら作ってきました。この写真はオープン段階で、中学生・高校生が「こんな場所になったらいい」ということを発表したところです。多くの人に囲まれてオープンすることができました。

こういうところは作っても利用者が最初全然いないみたいなのところが多いですが、最初から、そこに関わる子たちが、自分たちの居場所をどうしたらいいのかと、参画しながら作っていくことがとても大事なのかなと思います。そういうことをしていくうちに、何かやってみたいという子がどんどん増えてきて。あるとき、小学生が「飲み会がしたい」と言い出して、うちはカフェを併設しているのでジョッキでジュースが飲めるのですけれども、「じゃあ一緒にやろうよ」となって、子供たちが全力で放課後に飲み会をする。「皆さん乾杯」みたいなことをやって。

学校で「飲み会やろう」と言ってもなかなかできないと思うのですけれども、それこそ「いいじゃんいいじゃんおじさん」ですね、スタッフが「いいじゃんいいじゃんおじさん・おばさん」になって、子供たちをいつも応援しています。そうすると、飲み会以外にも「もっとこんなことしたいよ」と地域に出て企画し始めて、スープ屋さんとかラボしてスープを売ったり、子供たち向けに遊び場というイベントがあるのですけれども、そこで小学生がもっと小さい子供たち向けに出店として釣りゲームを考えたり、飽きちゃうとすぐにやらなくなっちゃったりするのですけれども、そういうことも含めて、まずはやってみたいというところを応援してくれる人がいることがとても大事なのかなと思っています。



中高大学生がつくる学生マルシェ



マグロを持ってきた高校生とみんなで捌く

近隣高校に声かけをお願いし、あつまった実行委員



活動中の部活動・プロジェクトチーム

- ・メディア編集部
- ・デザイン部
- ・すきまるしえ実行委員会
- ・高校生BAR
- ・まるイベント企画チーム(季節行事など)
- ・料理研究部
- ・けん玉部

(活動開始予定)ボードゲーム部



中・高・大学生が作るマルシェみたいなこともやっているのですが、マルシェは若者がやりやすい一つの表現方法ですけれども、近隣の高校に声をかけたら実行委員会ができて、みんなで一生懸命取り組んだり、水産高校が近くにあるのですけれども、「マグロを釣ってきました！」と言って、マグロをみんなで捌いたりしました。最近では地域部活動が立ち上がって、来年度は市に登録して活動をするのですけれども、年2回新聞を発行する「メディア編集部」や、デザインを学ぶ「デザイン部」などがあります。そこでは、自分たちでやる地域のマルシェやいろいろなマルシェの企業の名刺を自分たち作って稼げばいいじゃないかみたいなことも画策しています。地元のデザイナーさんや、うちのスタッフが入りながら、一緒に学んでいるところです。



まる メディア編集部
取材・編集・発行まで中高大学生で

写真の真ん中にいる方はスポンサー企業の方で、元新聞記者さん。プロボノとして関わってもらいながら一緒に編集をしてもらっています。大学生にも伴走してもらいながら、頑張っています。



企業と中高生が出会う合同説明会
「みらジョブFES」

いろいろな企業とどのように繋がるのかというところですが、地元企業からは人材不足の声があがっている。子供たちも地元企業を全然知らないなので、中学生・高校生向けの合同説明会ができないかと考え、昨年実施しました。



企業ブースを周り、大人へインタビュー

写真のような様子で、中学生・高校生がたくさん集まりました。就職となると要件や条件を聞くのですが、ここでは、それよりも働き方や企業の魅力を伝えてもらうことで、企業側にとってもいい学びの場になりますし、中高生にとってもこんな面白い企業が地元にあるのだなと知る機会になりました。



夏休み 企業へ職場体験へ

1日で130名の中高生が参加！



みんなの公民館まるの取り組み

- 子ども・若者が“自分でつくる「参画」”する居場所をつくる
- 公民館の理念をベースに「現代版のユースセンター」として再解釈
- 地域の大人・企業・行政とつながる “まちの共通財産”に
- 商店街の空き店舗を活用し、地域全体で育てる新しい「私設公民館」

宇宙食を開発している企業が焼津にあるのですよとか、この企業ではマグロ・カツオを-60度の冷凍庫に保存していますよとか、知らないですよ。話を聞くだけじゃなくて、その後実

際に写真のように建築事務所に行ったり、かつおを真空パックにしたりとか、そんなことを体験しています。みんなの公民館「まる」はいろいろな取り組みをしているのですけれども、こども・若者が自分で作る・参画するという居場所。ユースセンターが若者の居場所と言われるのですけれども、全国に1万以上ある公民館が若者の居場所になり得ないかなと考え、僕らは「まる」に公民館という名前をつけています。ですので、公民館の新しい可能性を皆さんと一緒に考えられたらなとすごく思っているところです。



商店街としては、空き物件の利用もやっていきたいです。こども・若者を地域の人たちが支えていく。これって「寄付」とかよく言われるのですけれども、僕は投資だと思っています。地域が残っていかないと、仕事も会社も潰れていきますし、働き口がないとどんどん人が出ていくところになっていくと思うので、皆さんと一緒に地域を作っていきたいということです。全国にこういう場所を広げていきたいなと思っています。



最後に、僕は民間なので、インターネットで発信したり、メルマガを作成したりしております。ぜひ登録していただければと思います。また、本日チラシを配付しましたが、初の企画で、今年から焼津のかつおとマグロが冷凍で届くという福袋をやっています。協賛して下さっている地元企業5社の協力により、原価ぐらいで卸して下さって寄付をしてくれるというものです。本当に素晴らしい会社に支えられながら運用しておりますので、ぜひ皆さんこちら

も注目していただければと思います。すみません、告知になってしまいましたが、よろしくお願ひします。以上です。ありがとうございます。

青山：ありがとうございます。面白いですね。対立図式を作りたいわけでは全然ないのですけれども、鈴木さんのお話を聞いていると、「こっちの方が公民館でしょ」という公民館業界へのちょっかいを感じるのですけれども、どうですか。わざわざ「公民館」という名前をつけなくてもいいものに「公民館」とつけたあたりの話は、もう少し聞きたいなと思っていたのですけれども。

鈴木：そうですね。まず、今から新しく施設を作るというのはとても難しいことかなと思っています。しかし、公民館にはもっと可能性がありまして、社会教育主事という人が多分いると思うのですよね。公民館は、いわゆるシニア層が使うイメージがとても強いと思うのですけれども、こども・若者の居場所を作るという動きもある中で、そこを一緒にできたらいいなと思います。「まる」に来る若者たちもいろいろな大人と出会えて楽しいとか、やりたいことが実現できる

ときに大人が助けてくれるみたいなのがすごくあって、それって僕がイメージしている公民館じゃない？公民館でできることなのではないのかな？でもなんでこんなにあるのにできてないのだろう？じゃあ、一緒にやりましょうよ！みたいな、そんな感じでつけました。

青山：ありがとうございます。もしよろしければ、参加者の皆さんはオンラインフォームを書いていただければと思います。残り45分。ここからは四人で喋っていきたいのですけれども、こういう場で一番の「あるある」は、打合せが一番面白いということがよくあります。今回も事前打合せをオンラインで行ったのですけれども、とても面白かったです。ですので、あの雰囲気、100までいかななくても、何とかあの雰囲気のままやりたいという気がしてまして、一つ提案ですけれども、今日、マイク置くのをやめませんか。

それぞれがずっと持つておくのはどうですか。(登壇者がマイクを持つのを見て) ありがとうございます。司会が振って三人が答えて…というのではなく、「発言していいですか？」もなしで大丈夫ですから、好きに話し始めていいルールでやっていきたいと思います。四人でのおしゃべりに皆さんにはお付き合いいただき、どこまで拾えるかわかりませんが、オンラインフォームでご参加いただければありがたいなと思っております。とはいえ、聞いてしまいますが、他の二人の話聞いてどう思ったかということ、どなたか言ってもらえますか。

藤野：お二人の話、楽しみにしていました。打合せからして、楽しかったのです。今、そのときの雰囲気を思い出そうとしていますが、改めてお二人のお話を聞いて、僕の中で印象に残ったことは、豊田さんがおっしゃっていた「地域がほぐれていく」というお話は、なんか新鮮で、思わずメモを取っちゃいました。

それから、鈴木さんのお話では、民設民営の公民館というだけでもすごい興味があったのですけれども、10代・20代の若者に人生のより道とか道草という、敢えて面倒くさいことをやるうぜ的なオーラを感じました。

青山：ありがとうございます。豊田さんのお話の「うっかり」とか、藤野さんのお話の「こぼれ出る」とか「緩む」とか、そういった枠組みの外に出るところに社会教育らしさを何となく見出すような話が多かったなと思うのですけれども、他の方はいかがですか。

鈴木：「越境」みたいな話を深めたいなと思っています。大きく越境することじゃないですか、島まで行くって。僕らが関わっている中学生・高校生は、学校と家の往復みたいな中でこの公民館に来るだけ。それでも最初はちょっとドキドキする。そこで何かをやるのが今までと違った世界を知ることになる。今までいたところから一つ越境するみたいな感じなのかな。初めから学びのためにやるわけではなく、何かを学びたいからチャレンジするというよりも、やりたいからやるんだよみたいな子たちが多くて、そういったところは島留学に来る人たちも同じなのかなと思いました。

「こぼれ出た地域活動」も「やりたいから」みたいなところが原動力になっているのかなと思っていて、そこが実は知らない間に越境しているというか、そんなイメージがしています。感想ですけれども、こういうところを深められたら面白いなと思いました。

青山：知らない間に越境しているし、学ぶためにやっているわけではないけれども学んでいるみたいなことがある。確かにそうですね。豊田さんはそういうことがたくさんありましたものね。

豊田：何か目的を持ってやるって感じではなくやっていたら、結果的にそうなっちゃったみたいな感じだなって、今伺いながら思いました。僕自身は藤野さんのお話を聞いて、担当が変わったけれども社会教育をやっている、社会教育が残っているみたいなお話を聞いて、社会教育は OS なのだな、ベースとして残っているのだなと感じました。鈴木さんのお話はすごくいろいろなものを混ぜている感じがして、この辺も社会教育として大事なことをやっていらっしゃるのだなみたいな感想を持ちました。

青山：確かに、アプリとして社会教育を捉えるか、OS として社会教育を捉えるかみたいなことを考えるときに、やっぱり社会教育は OS に関わるということがありますね。今日のテーマは基盤ですものね。そうだとすれば、これは三人に聞きたいのですが、いつも迷うのですけれども、挑発的な言い方になりますけれども、社会教育という言葉を使う意味をどう思いますか。

豊田：それ僕も…。

青山：教育次長として言わなくて大丈夫です。

豊田：ですよ。よろしくお願いします。いろいろなところを配慮して言わなければいけないのですけれども、島根県の社会教育委員をやっていたときから「社会教育」という言葉をなくしてもいいのではないかなとも思っていました。それはなぜかというと、言葉があった方がいいのかもしれないけれども、大事なのは在り方という話なので。社会教育的という言葉はすごくいいなと思いました。何かそういう在り方がしっかり広がっていけばいいし、社会教育はここまで、ここから先は地域振興とか産業振興とかという、そんな境界線を溶かしていくみたいなことの方が大事なのかなとも思いました。

藤野：僕、社会教育は必要だと思っているのですよ。だけれども、「社会教育をあんたどう捉えているの？」と聞かれたら言えないです。努力はしているつもりですが。先程の日比野学長のお話で「アートってこうだよ」って言えるのは怪しい、みたいな話です。僕もそうです。「社会教育はこうだよね」みたいなのは、大体胡散臭いと思っています。どこまでわかっているの？と。僕は社会教育をうまく言語化できないけれども、絶対に必要だよ、言語化がうまくできない魅力が社会教育にはあるよねと思っています。一方で、言語化するというか、みんなに伝える努力も必要かなと思いつつ、その難しさを絶えず感じながら、僕の中でそれを社会教育の魅力として捉えているという感じです。

青山：あの、社会教育はこうだという仕事を普段しております。

藤野：胡散臭い仕事です。

青山：そうそう。社会教育という枠組みの中で大事にされてきたことというのは、ただの地域づくりそのものを社会教育と呼ぶのではないということだと思っておりますよ。例えば、学びというものがそのプロセスに介在するところ。学びのためかということそうじゃない現場はたくさんあるのだけれども、そこでの学びの位置付けとか、人が変わっていくこととか、その中で地域も変わっていくという、ちょっと言い過ぎかもしれないけれども、このプロセス全体を学習と呼んでいたはずで、そういう学び性みたいなものと地域を混ぜたところに、社会教育とい

う言葉では捉えにくいけれども捉えようとしてきた何かがあるのかなという感覚はあります。

鈴木：教育という言葉にすごく「教える」イメージがあって、学校教育現場にいる人たちは、社会教育は何を教えるかと考える。でも、「学び」にフォーカスしたときに、社会教育はまずやってみて、その後に振り返りをして、そこから「学び」を抽出している感じがすごくあるなど思っていて、そこは大事な視点だと思います。つまり、「社会教育」という言葉が伝わりづらいと言いますか…。僕は今、いろいろな企業や個人の方と関わりながら地域の中で活動しているのですけれども、「僕は社会教育やっているんです。」では全然伝わらなくて、言葉を広げていくことがどうなのか。社会教育的なことをやっているみたいな自覚を持っていることはいいのですけれども、言葉をそのまま使って誰にでもわかるように社会教育を広めていくことが必要なのかと言われると、僕は「社会教育」という言葉が広がりづらいと感じています。産業振興のような文脈の人からすると「なんだ、それ？」みたいな印象を持たれてしまう。地域づくり＝ボランティアでしよとなると、関わり方が一気に薄くなってしまいます。企業にとっては、「地域のために頑張っているこども・若者を応援してください」の方が広がっていくのかなと思います。ただ、そこに何か社会教育的みたいなところがあるかが大事なのかなとは思っているので、重要なエッセンスは大事にしつつ、一方で、言葉を使うことにすごく意味があるかと言われると、僕自身はなかなか難しいと感じます。

青山：実は最近、各地の社会教育主事講習がすごく人気なのですよ。その制度設計に関わらせてもらった者からすると、ちょっと意外で。「そんな人気あるんだ？」って思ってたぐらい。そこには、社会教育士の称号を取りたいということもあったのでしょうけれども、そうではなく、人に説明するのはすごく難しい私たちがやっている何か、これを「あっ、社会教育だったのだ、これって」と言葉で何かストーンと落ちる人たちがいて、改めて自分がやってきたことを意味付ける言葉として「社会教育」がストーンと落ちて、主事講習に行ってみようかなというふうにいるときに、やっぱりこの言葉じゃないといけない部分というのがどこかにあるのではないかと、業界人としては期待したいという気持ちがあります。社会教育学者ってひねくれ者だから。あっ、会場の志々田先生が手を振って…。

豊田：全力で否定していますね。

青山：「教育的ですね」と言われると、「いやいや」と言うのですよ。でも「教育じゃないですよね？」と言われると「いやいや」と言うのですよ。社会教育あるあるじゃないですか？この「教育」という言葉をどう捉えるかによるのですけれども、そもそも「教育」とか「学習」って言葉がすごく狭く捉えられている中で、例えば、豊田さんのレジュメの中に「アンラーン」という言葉がありましたよね。でも、我々からしたら、「アンラーン」って「ラーン」そのものでもあると思って。

豊田：「学び・ほぐし」と言ったりもします。

青山：「学び・ほぐし」も学びじゃないですか。つまり、Education と learning の意味自体が本当は広いはずのものを狭く捉えていることによる「社会教育」という言葉の使いづらさがあるなど思うのですが、どうでしょう？

藤野：確かにですね。僕も最近、地域の方と話をしていて、「それって実は社会教育ですよ」みたいなことをちょこちょこ口にするのですよ。すると、その方が「初めて聞いた」と。そして、

そこからその方が社会教育に目覚めていく。社会人になって大学で社会教育を学ぶとか、そういう方はやっぱりいるのですよね。では、僕がその人が何をもって「社会教育」と捉えるかという、こう言ったら怖いですが、その人の生活というか生きざまというか、うごめいているそのものがもう「社会教育」と捉えている。でも、一人ではなく、そこには必ず関係者がいて、その中でされている活動が「社会教育」そのものですよと。その方もいずれ「社会教育」を口にするようになるのですよね、その人なりの捉え方で。それは見ていて面白いなって。それも社会教育の魅力の一つとして最近感じます。

青山：なるほど。そこには技があったり、プロセスがあったり、そこに働きかけて繋がりを作る中で生まれるものだったり、こぼれ出る何かを生み出すための手前のところで皆さんがやっている、言葉のついてない技やスキルやプロセスが多分あるのだろうなと思っていますが、多分それが「社会教育的」と言われているものの一つの正体ではないかなと思っているのですけれどもね。

鈴木：「社会教育」というと、個々の実践者の視点と学問的視点があると思っています。僕らの活動も「社会教育的だよ」と思うのですが、それは多分実践者的な視点だと思います。一方で、社会教育でずっと培ってきたコーディネーター力やスキルみたいなところはすごく価値のあるもので、そこを学び取りに行くときに学問としての社会教育があって、すごく大事だと思っています。ただ、実践で学問としての社会教育を使うかどうかということそこまではなくて、使い分けているなと思っています。こういうネットワークに参加させてもらって学ぶことがいっぱいあるなと思いつつながら、本当のローカルな現場での実践で「社会教育」という言葉を使うときは、この二つの視点を使い分けているのかなと今思っているところです。

豊田：先程、青山先生がおっしゃった社会教育主事講習で人が集まり出した話ですが、社会教育士という称号ができて、社会教育が開いた感じがしています。社会教育は元々開いているわけですが、それがさらに開いた感じがして。いわゆる社会教育主事として任命されないような企業の方とかも、社会教育士という称号を取りながら、社会教育的な関わりや役割を自分の現場でやっていくみたいなことが起き出したなと思っているのですけれども、それが社会教育関係者にとっても僕はすごくプラスだなと思っています。今関わっている社会教育主事講習、社会教育士講習には、企業の人 coming いるし、福祉系の人 coming いるし、県の職員も coming いるし、地域振興の行政職員とかもいるし、いろいろな人たちが混ざって、そこでもう 1 回社会教育が問い直されたり、自分たちが使ってる言語とは違う言語で話す中で通訳するようなスキルが身に付いたり、すごく面白くなっている感じはします。昔から知らないくせに、すみません。

青山：面白くなってきたのですよ。そうなってくると、もう一つ、次に皆さんへ投げかけたいことは、いわゆる社会教育行政というか、制度としての社会教育にできることは何でしょうか。例えば、藤野さんがまさにそうですね、社会教育主事とか、社会教育委員とか、公民館とか、社会教育行政制度の中にある社会教育の本丸の部分に今度はどういう役割が求められるのか。広がっていった社会教育と枠組みの社会教育との関係をどう紡いでいくのがいいのかとすごく考えるのですけれども、いかがですか。

藤野：先程は触れなかったのですが、僕のレジュメの中に書いてあるのですけれども、社会教育主事の専門性ってなんだろう、社会教育行政でやる社会教育って何だろうとレジュメにちょ

っと書いています。そこに括弧して税金を投入して行う社会教育って何だろうと書いています。僕は社会教育に触れたのが学生時代だったので、社会教育を全く知らずに社会教育行政に身を置いてから社会教育主事講習を受講したのではなく、先に社会教育を学問的に触れてからだったのですが、今でも、税金を使って社会教育事業として何をやる？というときに、社会教育って何だろうというのはつきまとったりしています。市民の幸せに繋がるためにこのお金を使うというのは、別に社会教育課にいなくても同じなので、そこはぶれていないとしたら、社会教育事業を通して、特定の誰かを満たすというよりは、この地域に住んでいてハッピー！幸せ！と感じるようなものに社会教育行政としてはアプローチすべきだみたいに、初期の頃は感じていました。今はどう思っているかという、実はますますわからなくなってきました。それは社会教育士が出てきたから。そこで改めて考えると、結局今日の導入にあったような社会教育行政としての社会教育って何？となります。僕の中では間違いなくそこにはミッションがあると思っていますので、それを今日教えてください。そういうのを話したいと思っていたので良かったです。

青山：まさに。どうですか、（豊田氏、鈴木氏に）お二人も何かありますか。行政に期待することでも民間に期待することでもよいですが…。

鈴木：そうですね。税金でできるということは、ある程度予算がつくということなので、何でもできるじゃないですか。いいなと思います。本当に可能性は無限だなと思います。僕ら民間はお金を集めなければいけないので、そこに労力がどうしても必要だったりするのですけれども、税金で予算がある、もちろん限りはあると思うのですけれども、もう全力でできるじゃないですか。本当にいいことですし、そこがちゃんと価値付けられることで「社会教育って大事だよ」と、地域にどんどん広がっていく。スタートになるのかなと思っているので、行政でできないことはすごくいっぱいあるのではないのかなと思っています。

僕らも、そういう人たちと一緒に地域づくりをしていきたいです。予算は、100%税金だけではなく、半分ずつでもいいと思いますし、いろいろなやり方がこれから出てくるかなと思います。もっと柔軟に、いろいろな人たちのセクターと考えながら、社会教育主事の中で広がってきたことをもっと広げていきたいなと思っています。

青山：ありがとうございます。豊田さん、どうですか。

豊田：僕も似ているかもしれないのですけれども、ぱっと思いついたのは三つぐらいあって、一つは、伴走していくというか、いろいろな実践者を支えていくみたいなのかなと思っています。二つ目と三つ目は繋がるのですけれども、点から線、線から面じゃないですが、一つ一つの取り組みをもう少し下支えするような仕組みを作っていくことが大事じゃないかな。プラットフォームみたいなものだったり。どうしても教育はお金が足りないので、外からそういうお金を引っ張ってくるとか、人が繋がる仕組みづくりが大事かと思っています。三つ目が、これは自分の希望ですけども、社会教育こそが、さっきから言っている境界を溶かしていくというか、縦割り行政みたいなものに横串を刺していくみたいなことをやればいいのかなと思います。「横串プロジェクト」みたいなものができることかな、求めることかなと思います。

青山：豊田さんは教育委員会にいらっしゃって、この話をすると、いやもう縦割りでそんなこと難しいですよとか、財務当局が…とか、いろいろなエクスキューズをいっぱい聞くのではないですか。社会教育行政にいらっしゃる方も今日何人が参加されているのではないかなと思うの

ですけれども、「いやいやそんなことは頭ではわかるけれども、なかなか現実には難しいよ」とおっしゃる気がします。そこに何か一つアドバイスできることはありますか。現場の人たちに。やればできちゃうものなのですかね。どうでしょう。自治体によっても状況は違うと思いますけれども。越境って、実際に関わっている方からはすごくハードルが高いことと言われることも多いような気がします。そんなことはないですかね？

藤野：若かりし時ですけれども、社会教育主事発令を受けて、僕の興味はもうあちこちに散らばっていたので、うちの係長は「とにかく外行け、外行け。机にいらなくていいから」みたいに言ってくれて…。

青山：仏の何とかさんって方？

藤野：仏のゴウダさん。まだ仏にはなってないですけれども。本当に環境に恵まれました。全然違う部署にもやっぱり現場があるのですよ。そこでチョロチョロしているとそこにはいろいろな方がいて。その人たちとの繋がりも僕の中ではすごい財産になって。それで、他の部署で、例えば計画作るときなどに、役所の中で人数を集めるというときに、「僕も入れてください」と言って。「お前関係あるのか？」「僕、社会教育主事なんで」と、社会教育主事がよくわからない中でどさくさ紛れに何回か入っていたのですよ。

社会教育主事になった今日と、昨日までの事務職員の僕とに違いはないけれども、そこは自由裁量。教育専門職としてある程度理解はされているので、「そうだ。社会教育主事がいてもおかしくないかな」みたいに、農業の計画とか、図書館の子供の読書計画とか、興味本位のところにアプローチしたら結構入れたりするという経験は若かりし頃ありました。

青山：なるほど。社会教育主事とか社会教育の人ですということの名乗って、いろいろなところに入っていくことがむしろできるということですね。面白いですね、ありがとうございます。

豊田：ぱっと思い浮んだことですけれども、一つは、先に引き算しなきゃいけないなということです。社会教育に限らず、みんな忙しすぎるから、そもそもメインの仕事+アルファで横連携をやろうみたいなどころまで余裕がないのですよね。やらないことを決めるとか、事業を減らすとかがない限り、横連携や混ざるみたいなことはないのかな、難しいのかなと思います。もう一つは、行政は組織的に、マネジメントする人が管理したいところがあるので、横と一緒にやるってよくわからなくなっちゃう。そういう不安があるので、上の人が「もうどんどんやれよ」という、それこそイネーブラーじゃないけれども、いいじゃんいいじゃんというタイプの人がいないと難しいのかなと思います。最後は、何か制度的に横連携をするというような組織などを作りますという結構大変なので、もう「実験」だと、1年だけやってみるという感じで、やる気がある人の will、意義や価値からではなく、やっぱりやってみたいというところをちゃんと引き出しながら連携することが現実的なところなのかなと思います。

青山：確かに、連携系の会議はすごくいっぱいあったとしても、全部に生涯学習課長さんがいて、毎週会議ですけれどもメンバーは大体一緒ですみたいなことはあるあるですものね。連携のために連携し出すと、業務だけが増えちゃうみたいなどころもあるあるだから、何のためにやっているかは常に考えておきたいところではありますね。ありがとうございます。

藤野：「まる」の話聞いていて、自分の町にまるがあったら、多分入り浸ると思うのですよ。いろいろなことが起きるじゃないですか。多分、「まる」で起きていることは、「これやりたい

ね」ってやっているうちに違うことに興味が出てきて、要するにこぼれ落ちた活動の塊みたいな印象を受けたのですよ。それで成り立っているような。そのときに、例えば公的な社会教育主事が「まる」へ行って、社会教育課の中での裁量で関われることもあれば、「それはここの部署だったらマッチングできる」みたいなところを現場レベルで引き合わせるなど、そういう動きはできると思うのですね。マッチング先の部署が「そうだね」と言うか、「うちは…」となるかわからないですけども、そういう繋ぎ方はできるのかなと思いながら聞いていました。

鈴木：そうですね。こども家庭庁ができて、若者の声をちゃんと聞いてまちづくり、行政施策をしていきたいと思います。ところがどんどん推進されている中で、社会教育には本当に可能性があるなと思います。こども・若者は全てのまちづくりに関わるので、子供の意見を聞かないといけないけれども、誰が聞くの？ということが実は今いろいろな自治体で起きている。社会教育では、こども・若者に関わって、子供たちの声を聞くことを実際にやっている。活動をしている子供たちと一緒に、行政も何かできないかというところは、行政の中にいるからこそできると思います。うまく子供たちの活動を拡大させていくところ、自分たちの活動で終わるのではなく、それがまちづくり、まちの変化に繋がるみたいなところは、本当に可能性の塊だなと思います。ですので、行政の力をぜひ皆さんに使っていただきたいです。それから、皆さん、社会教育って何なの？と言っているじゃないですか。それって、何でもできるってことですよ。すごくいいなと思います。

青山：これも社会教育なのだって言えちゃいますものね。うまく戦略的に使っていくことも必要になってくるかもしれません。(時計を見て)残り20分なので、みんなでオンラインフォームの意見を眺める時間を取ってもいいですか。スクリーンにオンラインフォームを映していただいてもいいでしょうか。ありがとうございます。四人で喋り始めた頃からの意見をゆっくりスクロールしていただくことができますか。(スクロールする画面を見ながら)気になったら喋るという感じで、皆さんの声をまずは可視化してみましょう。「どうやって魅力を言語化して、評価されるのか」ということもありますし、「地域がほぐれるっていいね」という意見もあります。

「『社会教育的』をうまく使う」というのもありますね。「福祉との相性が社会教育はいいのではないか」とか。なるほど。「四人の話、めちゃくちゃおもしろいです。毎週ラジオやってください」というのもあります。今日は結論もなく、論点をいっぱい皆さんにぶつけるという方式でやっていますのであまりまとまりはありませんが、何かいろいろなことが、それこそ頭の中が越境できるといいのかななんて思っています。「6歳児に社会教育主事をどのように説明しますか」、なるほどね。

この前、公民館を知らない人に公民館をどう説明するかというワークショップをやりましたけれども、あれも面白かったですね。「社会教育士はコーディネーターなのか？」みたいなコメントもありますね。なるほどね。プレーヤーの人もいるし、コーディネーターの人もいるかもしれませんね。いろいろかなと思います。

「まずはお金も」とか、「社会教育の先輩方は怖い気がしています」ですって。こうでなけれ

ばならないみたいなことを言うからでしょうか。権利を勝ち取ってきた社会教育の人の言いたいことはよくわかるけれども、そこをさらに越境していく大事さもあるよってことですかね。なるほど。「人も予算も削られているよ」なんていう現場の声もありますね。「全国版の社会教育ポータルを作ってほしい」、なるほど。社会教育士の方がどこにいるかなかなかわからないですよ。その辺は先程の調査の結果も楽しみに待ちたいと思います。何か気になる意見はありますか。三人も喋ってくださいね。どうですか。

鈴木：「実践をまとめてほしい」、僕らもそう思います。いろいろな実践がどのように取り込まれているのかを知りたいと思うので、どこかにまとまっていたらいいと思います。

青山：なるほど、そうですね。

豊田：「ドラマ」、いいですね。

青山：社会教育士のドラマ？

豊田：いいですね。青山先生も出ていただいて。

青山：僕が出るのですか。何役で出るのですか。

豊田：通行人 A ぐらいで。通行人がぼそっとめちゃくちゃいいこと言うな、みたいな。

青山：カフェで。横で、志々田先生がめちゃくちゃ喋っている。

豊田：ぜひ出てほしい。

青山：なるほど。「今日は、全体を通じてジェンダーバランスが悪いのではないか」という話もありますね。なるほど。そうですね。多様性というものと相性がいいときと悪いときと両方ありますものね。「素晴らしい企画でした」って、まだ終わってないですよ。でも、ありがとうございます。「社会教育って言葉をどうやって伝えるかってことですよ」、なるほど。スクロールしながら皆さんの議論を見て欲しいのですけれども、残り 15 分程度で話題にしたいのは、この我々がやっていることの意義をどう人に伝えていくか、あるいはどう評価し、どう伝えていくかということはずごく重要だなと思ってますが、いかがですか。とっても評価しづらいじゃないですか。非認知能力が上がったとか、まちづくり何とかが上がったとか、来館者数が上がったとかというような、目に見えるものと目に見えないものがあつたときに、目に見えづらいものに我々は価値を置いているから今日の話にも出てきたような気がしていて、これをどう地域の中で可視化したり、特に財政的なところに伝えていったり、社会的な合意を取り付けたりしていくのか。

とはいえ、評価前提でやりすぎるとつまらない話になっちゃうだろうと思いますが、意義を可視化したり、伝えたりするところに、三人がどう関わっているか知りたいなと思ったのですけれども、どうですか。何かありますか。鈴木さんは企業やスポンサーにも伝えなきゃいけないですよ。

鈴木：そうです。評価しないといけないですよ。

青山：その辺はどのようにやっているのですか。

鈴木：来館者数だったり、できてきたプロジェクト数だったり数値的に KPI で出しているという取り組みはしていて、そこを企業に伝えることが一つ大事なところかなと思います。それから、相手はやはり人でもあるので、エモーショナルな部分として「すごくいい活動だね」

と感じていただけるように、現場に来てもらうことを大事にしている、活動の発表会がある時は、企業の方に来ていただいているいろいろな方と関わってもらう。中には、子供たちの活躍を見て、「いや、本当にいい活動だね」と言って現金を「はい」ってくださる地域の経営者もいます。数値としての根拠は納得の材料として大事なのですけれども、多分人の心が動くとか、何かをしようと思うときは、数字だけじゃ動かないと思うのですよね。アートの話でもありましたけれども。

その原動力みたいな根拠づけとして数値で見せるために、アンケートを取ることと、現場をちゃんと作り、実際見てもらうことの両方がすごく大事なかなと思っています。

青山：ありがとうございます。他のお二人はいかがですか。評価や成果とどう付き合うかという話でもあると思うのですけれども。

藤野：もし可能でしたら僕のレジユメの2ページ目をスクリーンに映せますか。皆さんはお手元にも資料がありますのでご覧ください。一番上に「評価」という言葉を使っているのですが、わかりますか。先程、避難所運営マニュアルを作るという話をしました。小学校・中学校の避難所運営マニュアルを作っていて、まだ全部はできていません。避難所運営マニュアルを作るという目的自体は、できたってことを評価して、何個できた、何校ができたというふうに言えば目的は達成しているかもしれないけれども、例えばそれを作るときにその校区の方が集まるのですよね。集まってそこでラウンドテーブルができると。今、マニュアル作りのために集まってその話をしているのだけれども、何とかマニュアル作りの話だけではなくて、この地域の話のことをしてほしいと思うわけです。防災の観点でいいから。そのうちに防災でないことも喋り出したらなおいいみたいな感じでそのラウンドテーブルを回します。

青山：それは参加者にも言うのですか。

藤野：ストレートには言わないです。裏のテーマなので。社会教育主事の感覚で気付きの部分を引き出します。避難所が開設したら、自分で避難してくれる人はいいけれども、来られない人もいるよね。先程述べた災害弱者のような方。避難行動要支援者というのですけれども、その人ってどこにいるの？どこに住んでいるの？みたいな話をします。

その評価として、例えば、町内会の防災訓練の中で、その避難行動要支援者の方を把握して、実際にその方の担当を地域で決めよう。そしてその方に実際に声をかけて訓練をしようとなれば、それはマニュアル作りから生まれ出た町内会活動。僕はそちらに価値があるというふうに見えます。だから、僕はそれを評価軸とは言わないけれども、そういうことを拾うことも評価の一つじゃないか、ということを経験で学びました。

青山：こぼれ出る側に本当の成果みたいなものを見るけれども、それは常に出るわけではないですものね。だからその出たものにちゃんと気付けるアンテナを仕掛け人側が持っているかどうかということはずごく重要になりますよね。

藤野：そのコツをつかむと、こぼれ出るような関わり方もできる。それは社会教育主事一人では絶対できないですよ。地域の方とタッグを組む。同じ意図を持った人を見つけて、その人たちと「こういうふうになったらいいね」ということを描いて、それを回していくと、いい感じにこぼれ出る。

青山：メダルゲームみたいですね。バーが手前に来たときにちょうどメダルを落とすところぼれるじゃないですか、メダルが。

藤野：そうです。そんな感じでうまくそこに落ちてくれば、しめしめと。ポロポロこぼれ出るといいな。そうならないときもあるのですけれども。

豊田：ちなみに、なんで評価の質問をされたのですか。

青山：評価とか、成果を可視化するというコメントが多かったということと、それから皆さんがフォームに書いてくださったことの魅力を、今日のテーマで言えば社会教育の意味というものをはっきりとすることと同時に、何か見えるようにしたい。人に伝えないと、結局現場が回らないよねという声をよく聞くので、どうされているのかなというのはテーマにしてもいいかなと思いました。どうでしょう。

豊田：なるほど。では、今、私の市でどう評価しているかはちょっと置いて。何回イベントをやったかとか、そこに何人が来たかというよりは、どれだけアップデートしたかとか、どれだけ変容が起こったかみたいなのの方がいいのではないかなと、個人的には思います。測りづらいですけども。そもそも評価を何のためにやるのかという話だと思うんですけども、行政的に管理するためとか、予算を取るためとか、そういうことだとは思いますが、評価の哲学というか、評価の在り方自体も変わっていいと思います。やってきたことを振り返りながら、どう学びを増やしていくかみたいな文脈で言えば、生まれてきたストーリーを事例集みたいな感じでバーンと出してもいいのかもしれない。

どう変容したかとか、どう学びが生まれたかとか、評価はそっち側の方がいいのではないかなと思います。

青山：僕も本当そう思います。中期計画などを作る委員会に入ると、KPIの一覧を見せられて「これでいいでしょうか」などとやるのですけれども、あれでいいかどうかはわからない。でも、健康診断みたいなもので、ガクッと数値が落ちたら気にしましょうね、ぐらいのお付き合いの方がいいよなと思います。あれに本質が宿っているとは考えづらいことも多いですものね。

鈴木：KPIの方が、僕らの場合は変容を見られることが多いですね。子供たちが来て、こういうことをやることによって、こういう変化が生まれるのではないかといった仮定を作って、事前・事後でアンケートを取って見たら実際はこんな感じだった、全然うまくいかなかったねと。それを見て、じゃあ次どうしようかと考えて、トライアンドエラーをやりながら、子供たちに実際に感想を聞くとか、そういうことでいいとは思いますが。

また、それが短期的にどう見えるかどうかというのも議論の余地があると思います。5年後に変容が見えてくるみたいなことも、こぼれ出た地域活動みたいなストーリーとなって、長期的に見たらすごく良かったよねというところを、ある程度最初の段階で評価することもすごく大事なことかなと思います。

藤野：今、長期的に見たらという話が出たじゃないですか。だから、社会教育かなと思うのですよ。教育かなと。教育というのは、今日種をまいて明日芽が出るとかというものではないの

で、小学校一年生の時に学んだことが二年生で生かされることもあれば、本人は無意識かもしれないけれども六年生のときに、あるいは大人になってから生かされることもある。教育ってそういう要素があるので、教育の意図どおりになるかは別としても、種をまいて、それがどうなるかという部分は大事な見方かなとは思いますがね。

青山：評価する側とされる側との間にコミュニケーションがあるかどうかということもすごく重要だと思います。「うっかり」とか「こぼれ出る」とか、そういうところの価値を共有できるかどうか重要で、その上でKPIを取るみたいなことがあるといいですね。皆さん、この評価になった途端すごいですね。次々とコメントがついていますが、残り5分しかありません。この会は、飲み会のようにいきなり閉まるのですけれども、いいですか。このような途方もないおしゃべりを皆さんに聞いていただきながら、コメントもいただいてありがたかったですけれども、(登壇者に)最後に一人1分半以内ぐらいで言いたいことを言う時間は取りたいと思いますので、考えてくださいね。

今日のこの場は突然終わっていきます。開放系で終わっていきます。「社会教育」という言葉を、広い社会教育か、狭い社会教育かと考えたときに、僕の場合として、今日のご登壇いただいた三人は社会教育という言葉を使わなくても社会教育ができる人たちだという感覚があります。

一方で、全国的に見ると、「社会教育」という言葉があることで社会教育ができる人たちもたくさんいるだろうということにも思いを馳せます。その意味で、既存の社会教育の枠組みがなくなってしまうと社会教育がなくなってしまうことも多いので、今日話題に出た社会教育的なものについて地域で合意を作っていくときにどう伝えていくかとか、どう作っていくかということが改めて大事ななと思いました。どうでしょうか。残り1分ずつぐらいあるので、どなたからでも。藤野さん、お願いします。

藤野：話題提供の一発目で、その時に最後言えなかった3行が読み原稿に残っているので、僕はそれを読んで終わります。僕は恵庭市の職員です。どこの部署に行っても、恵庭市民がこの町でハッピーと思っていただければいいという仕事をするという単純な動機づけで仕事はしていますが、その際に社会教育をやっている人間としては、どこの部署でも社会教育ができるということはお伝えしたいことです。むしろ社会教育の考え方や手法、あるいは社会教育的なアプローチの方が、より良いものができたり、突破できたりという、そういうことはあると思います。社会教育の感覚や発想を持ち込まないと成し遂げられないミッション。防災はそう感じました。そういうことがいっぱいあると思っています。ご清聴ありがとうございました。

青山：ありがとうございます。お二人もどうぞ。どちらからでも。

鈴木：最後ですよ。僕らが取り組んでいるみんなの公民館「まる」というのはある意味社会実験でもあって、これをまずは持続可能にさせていく。地域の人たちが少しずつ参画してその場所を作るというのが一番のコンセプトですが、それって公民館も一緒だなと思っていて、民主主義というか市民参加の根幹が社会教育にあるのかなと僕らはすごく思っています。

そういった意識がだんだんと醸成されると、地域が行政任せじゃなくなって、自分たちがや

っていかないといけないのだというシチズンシップが生まれてくる。自分の町に対してオーナーシップがちゃんと生まれるというのが本当に大事なことかなと思っています。ぜひ「まる」を応援していただいて、焼津にも遊びに来ていただければなと思っていますので、引き続きこの社会教育の仲間に僕も入れていただければと思います。本日はありがとうございました。

豊田：全くまとまってないですけども、静岡の裾野市に小田さんという方がいらっしゃるんですけども、社会教育の目的は社会の形成者を育てることだとおっしゃっていて、そこはすごく同意するところです。自分ごととしてこの地域を作っていくとか、社会を作っていくという人を育てていくことが大事だと思います。その育み方について、学校教育と社会教育をそんなに分けなくてもいいと思うんですけども、ずっと議論されているような社会教育的なエッセンスで培っていくとか、そういう場を作っていくのが社会教育なのではないかなと思います。ちょっと飛ばした鮭の話をする、帰ってきたいと思う鮭を育てるのか、鮭が帰りたい川を作るのかと書いているのですが、学校教育の文脈では、将来戻ってきたいと思う子供を育てるような感じでふるさと学習をやっている。でも、やりすぎるとよくない中で、そうではなくて、子供たちが自分の意思で帰ってくるような、帰りたいと思うような地域をつくるのが大事で、それは当事者意識を持った大人が、今は不便かもしれないけれども、ここを何とか良くするぞとか、何か不便だけど楽しいよとか、そういう姿を見せることが大事だと思います。

そのことをここでは鮭が帰りたい川をつくと書いてあります。三次は、社会教育委員自体が行動する、「行動する社会教育委員」という表現をしているんですけども、当事者を育てていくために、楽しくやっていくことや、エッセンスというものが大事なのではないかなということも今日改めて感じました。長くなりましたけど、以上です。ありがとうございました。

青山：ありがとうございました。目の前にタイマーがあるのですが、残り30秒ということで、ぴったりなのかよくわかりませんが、今日は越境系・こぼれでる系のトークセッションということで、いろいろなものをこの四人でワットと話させていただきました。どう受け取っていただいたかはわかりませんが、皆さんにも入っていただいて、こうやって話を進めて参りました。ただの地域づくりでもない、でも、ただの教育でもない。この間の中で、今の社会にこういった社会教育的なものが広がっていくということをすごく大事にしたいと思いますし、これだけの方が集まっていた中で、このシンポジウムが社会基盤としての社会教育と、最初にも言いましたが社会教育制度内にあるものも多い中で、この二つをうまく越境していくことを目指して、いろいろなことをやっているといいのかなというふうに思いました。

反省は、オンラインの方はこのフォームの結果を見ながら話を聞いていただくことがしづらかったのではないかなと思います。オンラインの皆さん、勝手に読み上げたものもあったと思うんですけども、ご不便をおかけしたかもしれません。そんな形で今日は終わりにしたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

閉会挨拶

佐藤 貴大：国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長

社会教育実践研究センター長の佐藤でございます。シンポジウムの閉会にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。ちょっと高揚感もあって、固いシンポジウムなので聞くの止めようかなと思ったのですが、ちょっとあえて聞きます。楽しかったですか。

(多くの方に挙手いただいたのを見て) ありがとうございます。もうそれが聞けたのであれば本当に何よりでございます。

本日のシンポジウムにつきましては、会場には120名を超える方。あとオンラインでも常時400名前後の方々にご参加いただきました。師走の休日にも関わらず、たくさんの方にご参加いただきましたことに御礼申し上げたいと思いますし、あと皆様方のご協力によりまして、多少時間が過ぎてしまったのですが、予定通り進めることができましたことに、厚く御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

また細かいところで、不手際等ご不快な思いをされる方もいらっしゃるかもしれません。そういう方いらっしゃいましたら、この場をお借りしましてお詫び申し上げます。

本日はコミュニティ形成という切り口から、社会教育の今後の展望について、特別講演、調査研究の報告、シンポジウムということを通じて探ってまいりました。いかがでしたでしょうか。社会教育の取組が生み出す楽しさや緩やかな繋がりが、学びの場へと人々をいざない、持続的な地域コミュニティの基盤を形成していくことについてご理解を深めていただくとともに、新たな時代における社会教育の魅力と期待について感じていただけたのであれば幸いです。

今日の最後のシンポジウム、とても私も面白かったのですが、面白かったがゆえに、あえて企画した1人として言わなきゃいけないかなというふうに思っております。社会教育法が制定されて76年。確かに制定された頃と現在の社会教育が置かれている現状は異なっているのではないかなと思います。ですが、私は今日まで行われてきている全国各地の公民館や図書館、博物館を初めとしました社会教育施設の活動、あるいは子どもや学校の周辺で行われてきたPTA、子ども会、ボーイスカウト、ガールスカウト活動、また近年では全国各地で行われてきております地域学校協働活動など、脈々と培われてきたその社会教育の手法、あるいは考え方といったようなものはこれからの時代にも必ず求められるものになるというふうに私は思っております。

冒頭ご案内がありました通り、現在中央教育審議会でも社会教育の在り方について幅広く議論が行われております。本日のシンポジウムを契機に、皆様方のお近くでもこれからの時代の社会教育の在り方について、それぞれのお立場での実践などをもとに、全国各地で議論がなされることを私として心より期待しているところでございます。

社会教育実践研究センターでは、今後も全国の社会教育の活性化に資するために、研修事業、調査研究事業の充実を図っていきたいと思っております。皆様方におかれましては、当センターおよび研究所の取組全般に対して引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

今日は、文部科学省での開催となりましたけれど、ぜひ、上野の社研でもお待ちしておりますので、よろしく願いいたします。

結びになりますが、それぞれの地域、自治体において生涯学習、社会教育の取り組みがますます発展されること、皆様がますますご活躍されることを祈念いたしまして、簡単ではございますが、閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

第3章 アンケート結果から得られた示唆

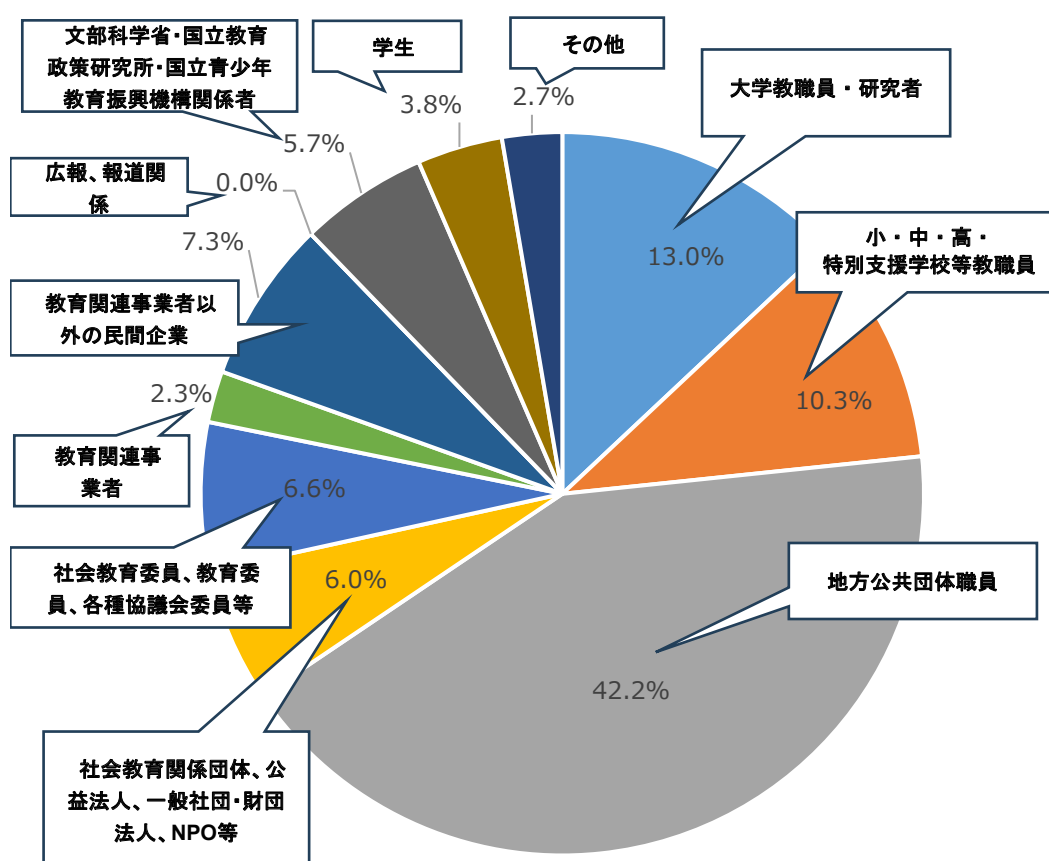
【アンケート結果】

以下では、本シンポジウム終了後に行ったウェブアンケートの結果を取り上げる。紙面の都合上、アンケートの詳細は割愛し、主要な結果のみを掲載する。なお、本報告書にて公表した結果は、公表することに同意いただいた参加者のものである。

参加者のアンケート回答者数は 239 件であった。これは本シンポジウムの参加申込者数 783 名の 30.5%、当日の参加者数 541 名の 44.2%に相当する。

アンケート回答者の属性について、内訳を図 2 に示す。

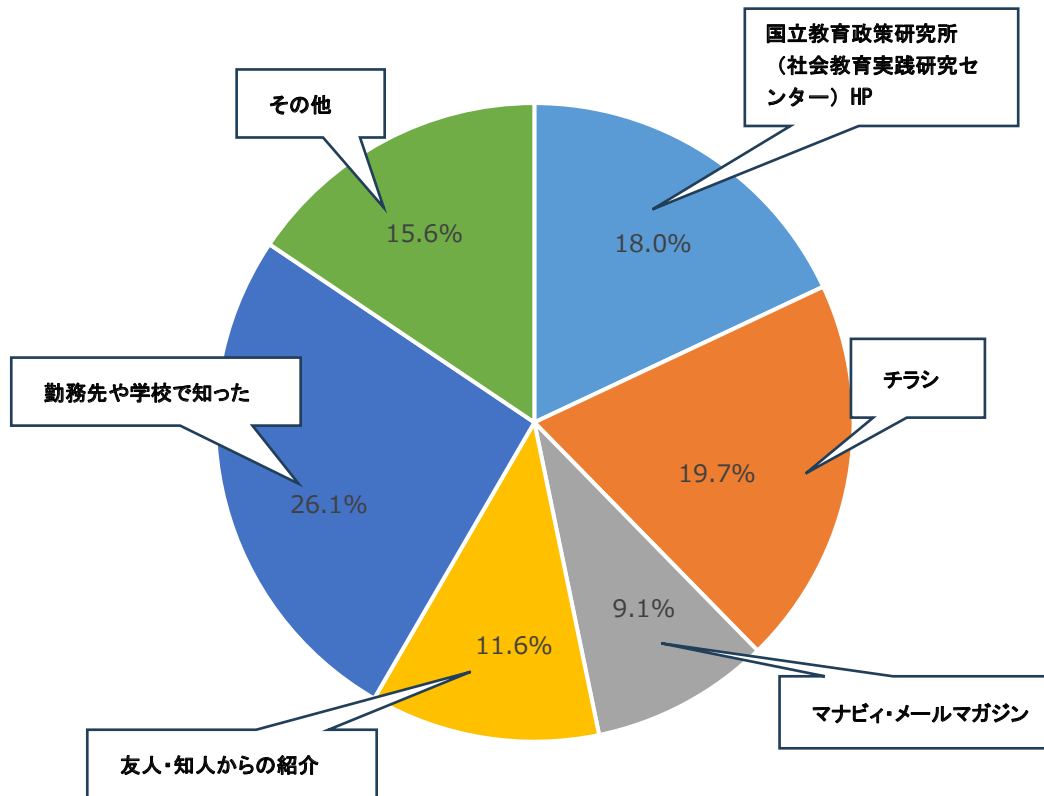
図 2 アンケート回答者の属性



属性として最も多かったのは、地方公共団体職員 42.2%、次いで、大学教職員・研究者 13.0%、小・中・高・特別支援学校等教職員 10.3%であった。やはり社会教育の担当部署のある地方公共団体職員が最も多く、社会教育と学校教育との連携を図る観点から大学、小・中・高・特別支援学校等の教職員も興味を持っていただけたのではないかと考えられる。

本シンポジウムを知ったきっかけとしては、「学校や勤務先で知った」が26.1%、「チラシ」が19.7%、「国立教育政策研究所（社会教育実践研究センター）HP」が19.7%、「友人・知人からの紹介」が11.6%であった（詳細は図3に記載）。

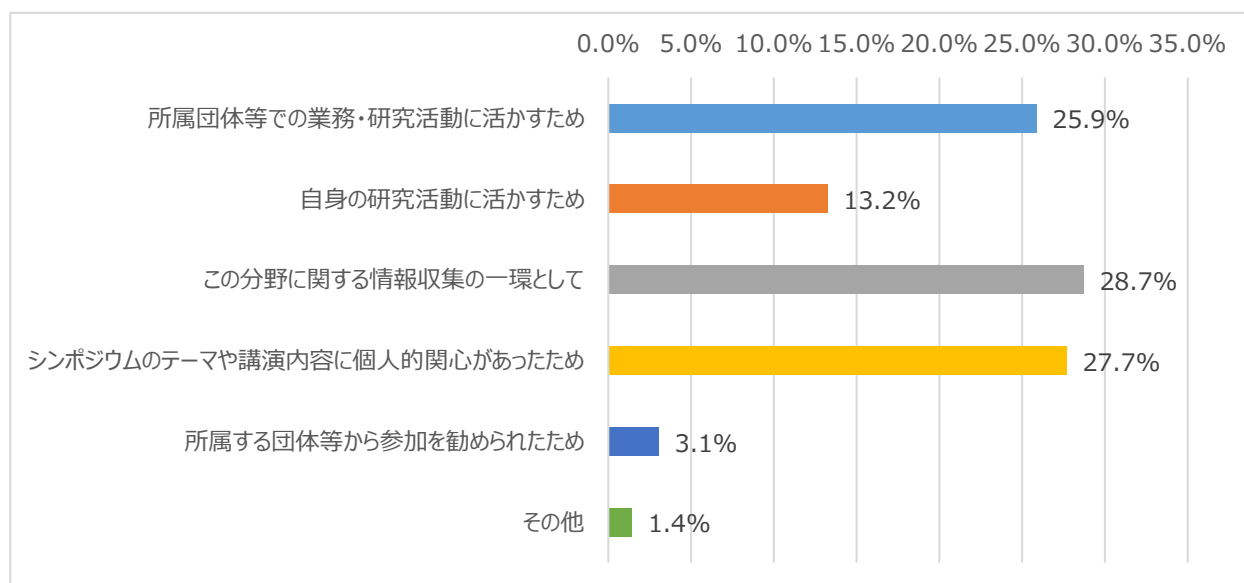
図3 本シンポジウムを知ったきっかけ



今回の項目には入っていないが、参加申し込みに関しては、Peatix（イベントの周知、申し込み等のできるプラットフォーム）でも参加案内をしたので、そこから申し込みをした者もいた可能性がある。

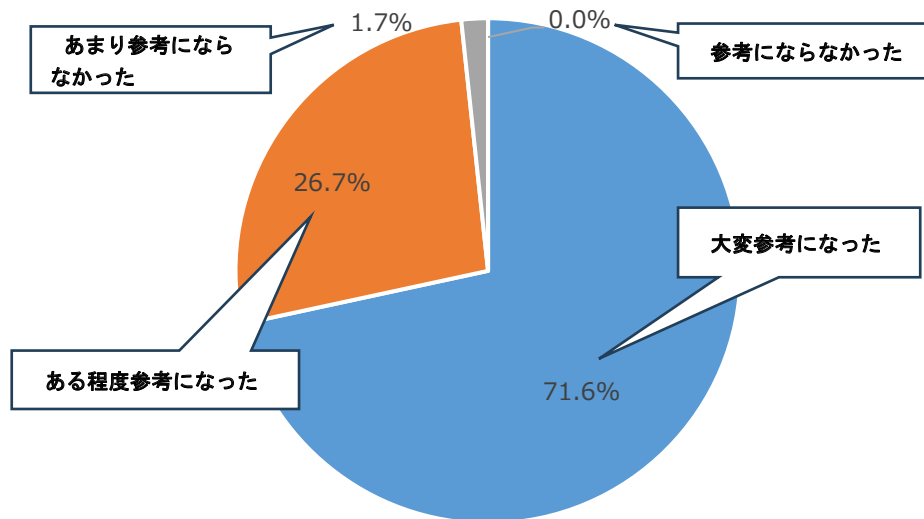
本シンポジウムに参加した目的（複数回答可）については、「この分野に関する情報収集の一環として」が28.7%、「シンポジウムのテーマや講演内容に個人的に関心があったため」が27.7%、「所属団体等での業務・研究活動に活かすため」が16.8%であった（詳細は図4に記載）。

図4 本シンポジウムに参加した目的

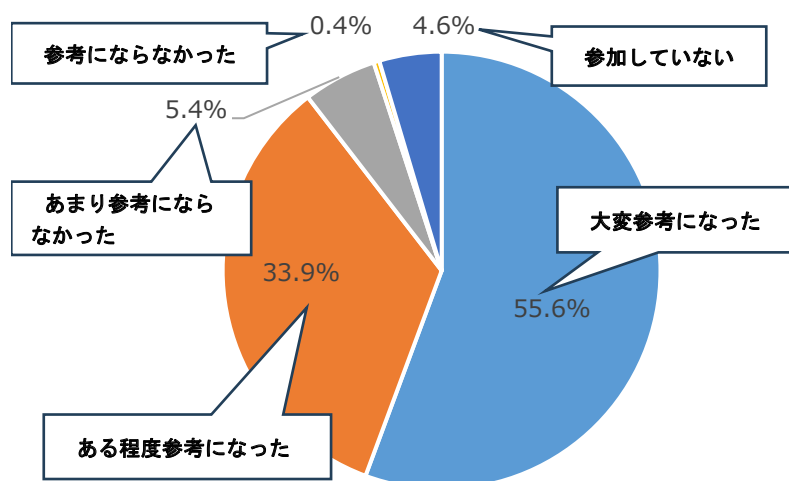


シンポジウム全体の満足度は、「大変参考になった」と「ある程度参考になった」を合わせて98.3%となった（図5）。個別では、「大変参考になった」と「ある程度参考になった」を合わせて特別講演が89.4%、調査研究報告が89.2%、シンポジウムが92.4%となっており、ほとんどの参加者にとって満足度が高かった。

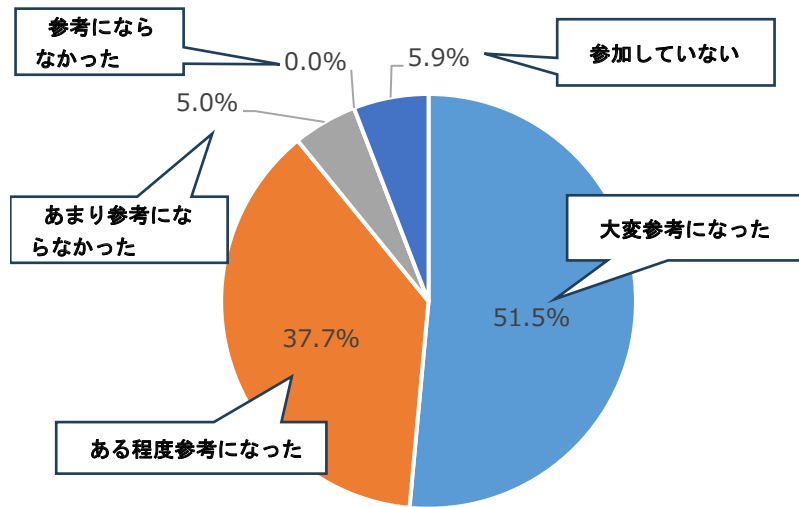
図5 シンポジウム全体の満足度



特別講演「これからの社会教育の在り方を考える～今、なぜ社会教育なのか～」

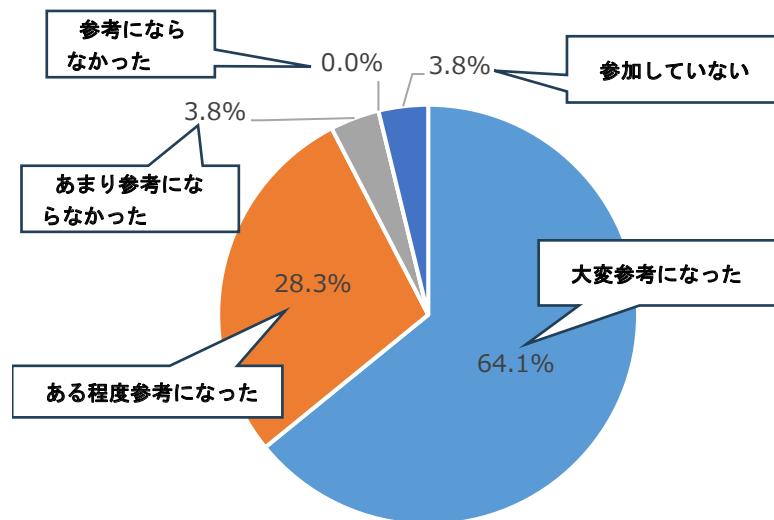


調査研究報告「社会教育主事と社会教育士等の在り方に関する調査研究」



シンポジウム

「これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える～今、なぜ社会教育なのか～」



シンポジウム全体に関する感想・意見について、全体で 185 件の回答が寄せられた。以下では、意見や感想の内容ごとに分けて一部を列挙する（なお、個人が特定されないよう、また表記を整える観点から、表現を適宜編集している）。

◇自由記述でいただいた御感想・御意見（一部抜粋）

今後、国立教育政策研究所にどのようなイベント企画や情報提供を期待しますか。

○テーマ

- ・学校現場における ICT や DX 関係の取組
- ・社会教育士に関すること（ネットワークづくり、研修会など）
- ・今回と同様の内容のもの
- ・首長部局向け社会教育の意義
- ・社会教育がよくわからない自治体職員向けの社会教育の有用性
- ・社会教育やコミュニティスクールについて学ぶ場や情報交換
- ・各分野とのネットワークが作れる場
- ・社会教育や社会教育士に関すること
- ・今回実施のテーマの継続
- ・社会教育とアートの関係
- ・社会教育の最新の動向や社会教育の魅力を感じられるイベント
- ・社会教育主事と社会教育士の在り方に関する調査研究や国の動向を学ぶ機会
- ・社会教育主事や社会教育予算が必要でないといわれる側の意見を聞く機会
- ・障害者の学び、不登校

○実施方法

- ・今回と同様の方式
- ・実践を基にしたトークセッション
- ・全国から参加できる形式のもの

シンポジウム全体に関する意見、感想など

○意見

- ・女性登壇者がもっといるとよかった。特にシンポジウムのほうに女性を加えてほしい。
- ・地方なので Web 配信はありがたかった。
- ・音声や画面も良く大変聞きやすかったです。
- ・slido などの仕組みを使ってインタラクティブを実現してほしかった。
- ・オンラインで参加したが、Google フォームが途中で終了してしまい、書き込みができなかったので、適宜二次元コードを画面表示してほしかった。
- ・オンラインの通信状況が良く、「会場に行けば」と思うこともなかった。
- ・オンラインと会場とのやり取りがもっとできると良かった。
- ・会場までの地図がわかりにくい。
- ・矢印などの案内板を設置いただきたい。
- ・エレベーター、エスカレーターが使用できるようにしていただきたい。
- ・このような機会が月例で配信されるとありがたい。

○感想

- ・日比野学長の講演が素晴らしかった。アートと社会教育と地域づくりは改めて親和性が高いことが確認できた。
- ・志々田先生の説明は短い時間ながら調査の意図が良く分かった。
- ・シンポジウムがとても勉強になった。青山先生が素晴らしかった。
- ・シンポジウムの4人のお話がとても興味深く、時間があっという間であった。もっと聞きたかった。
- ・具体的な事例も知れたので、今後の公民館・地域活動に反映していきたい。
- ・改めて社会教育について考える機会となった。社会教育行政に携わる者として、何ができるか、また考えていきたい。
- ・調査研究が大変参考になった。
- ・社会教育主事の資格取得講習は、出る側も出す側も現場の負担が大きい。また、その社会教育士の「称号」が、どのような意味をなすのか、聞いていてよく分からなかった。さらには、今回のシンポジウムに参加して、社会教育の広さを痛感した。
- ・社会教育の目指すところやゴールは何かを考えるきっかけになった。

- ・社会教育主事として発令前と後、教育専門職としてモヤモヤしていたものがはれた。まずは社会教育ネットワークを作りたい。
- ・「社会教育」を改めて考え直すことができた。社会教育士として、社会教育委員として行き詰まっていたが、今日の学びを生かして活動していきたい。

【アンケートから得られた示唆】

アンケート結果からは、全体的に参加者に満足が得られるシンポジウムができたと感じることができ、とても安堵している。ただし、アンケートの回収率が参加者の44.2%からしか得られていないことについては留意が必要である。

個別のプログラムの満足度も9割前後の方が「参考になった」「ある程度参考になった」と回答しており、とても良いプログラムだったことを示唆している。改めて、登壇者の方々をはじめ、本シンポジウムにご協力いただいた関係の皆様から感謝を申し上げる。

自由記述欄に目を向けると、今後のイベント企画等の希望については、参加者の多くが社会教育関係者だったこともあり、社会教育関係の希望が多かったが、「障害者の学びや不登校」といった学校教育の関係や、昨年度の教育研究公開シンポジウムのテーマに近い、「学校現場におけるICTやDX関係の取組」といったものも見られる。

また、シンポジウム全体に関する意見・感想については、「オンライン配信はありがたかった」、「通信状況が良く、「会場に行けば」と思うこともなかった」という肯定的な意見とともに、「slidoなどを使ってインタラクティブを実現してほしい」「Google フォームが途中で終了してしまい書き込みができなかった」という意見など、オンライン配信に関する様々な意見が見られた。また、「会場までの地図がわかりにくい」、「矢印などの案内板を設置いただきたい」など、会場（文部科学省講堂）までの案内が不十分という意見などもいただいたことから、真摯に受け止め、次回開催に活かしていきたいと思う。

令和7度 教育研究公開シンポジウム

これからの時代の社会基盤としての社会教育を考える
～今、なぜ社会教育なのか～

令和8（2026年）3月

発行所 国立教育政策研究所
住 所 〒100-8951
東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
印 刷 株式会社ワーナー